

佐賀市文化財調査報告書第19集

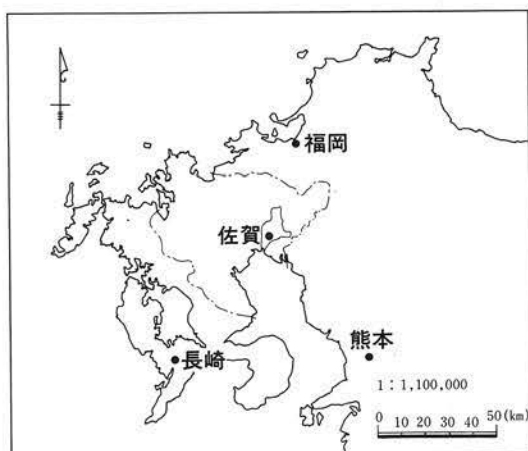
黒土原遺跡

昭和 62 年 3 月

佐賀市教育委員会

佐賀市文化財調査報告書第19集

くろ つち ばる
黒土原遺跡



昭和 62 年 3 月

佐賀市教育委員会

序 文

この報告書は、私立学校建設工事に先がけて、昭和60年度に発掘調査を実施した黒土原遺跡の報告書です。

今回の調査では、予定地内に15基もの古墳の実態が明らかになり、その中から須恵器・土師器等の遺物が多数出土しました。

また、当地では弥生時代初期の支石墓も発見され、佐賀地方での墓制史研究上、貴重な資料を得ることができました。

その成果をここに報告書としてまとめ、学術資料として、また市民の方々の文化財保護に対する理解の一助として役立てていただければ幸いです。

尚、調査に御協力いただいた地元の方々はじめ、佐賀県教育委員会文化課、佐賀県立博物館、松尾商事株式会社・松尾建設の関係各位に深甚の敬意を表します。

昭和62年3月31日

佐賀市教育委員会

教育長 山 田 清 人

本文目次

	頁
I 序 説	1
(1) 調査に至る経過	1
(2) 調査の組織	1
II 遺跡の環境	2
III 遺構と遺物	6
(1) 遺跡の概要	6
(2) 支 石 墓	6
(3) 甕 棺 墓	9
(4) 古 墳	11
(5) 祭祀遺構	33
(6) その他の遺構	35
IV ま と め	37

挿 図 目 次

Fig. 1. 黒土原遺跡周辺遺跡分布図	2
Fig. 2. 東千布遺跡	3
Fig. 3. 銚子塚	3
Fig. 4. 西隈古墳	3
Fig. 5. 丸山遺跡	4
Fig. 6. 石人石馬	4
Fig. 7. 帯隈山神籠石	4
Fig. 8. 黒土原遺跡調査区見取図	6
Fig. 9. SA001支石墓実測図	6
Fig. 10. SA001 " 出土土器実測図	7
Fig. 11. SA003支石墓実測図	7
Fig. 12. SA003 " "	8
Fig. 13. SA004 " "	8
Fig. 14. SA004支石墓出土土器実測図	8
Fig. 15. SK001土壌実測図	9
Fig. 16. SK001土壌出土土器実測図	9
Fig. 17. SK002 " "	9
Fig. 18. SJ 001甕棺墓実測図	10
Fig. 19. SJ 003 " "	10

Fig. 20. SJ005 甕棺墓実測図	10
Fig. 21. 甕棺実測図	11
Fig. 22. ST003 古墳測量図	12
Fig. 23. ST003 古墳石室実測図	13
Fig. 24. ST003 古墳出土遺物実測図	14
Fig. 25. ST004 古墳測量図	15
Fig. 26. ST004 古墳石室実測図	16
Fig. 27. ST004 古墳出土土器実測図	17
Fig. 28. ST005 古墳測量図	18
Fig. 29. ST005 古墳石室実測図	19
Fig. 30. ST005 古墳出土遺物実測図	20
Fig. 31. ST003・004・005 古墳墳丘断面図	21(折込み)
Fig. 32. ST007 古墳墳丘測量図	22
Fig. 33. ST007 古墳石室実測図	23
Fig. 34. ST007 古墳出土土器実測図	23
Fig. 35. ST008 古墳測量図	24
Fig. 36. ST008 古墳石室実測図	24
Fig. 37. ST008 古墳出土土器実測図	24
Fig. 38. ST009 古墳測量図	25
Fig. 39. ST009 古墳石室実測図	25
Fig. 40. ST009 古墳出土土器実測図	25
Fig. 41. ST010 古墳測量図	26
Fig. 42. ST010 古墳石室実測図	26
Fig. 43. ST010 古墳出土鉄器実測図(1)	26
Fig. 44. ST010 " (2)	27
Fig. 45. ST011 古墳測量図	28
Fig. 46. ST011 古墳石室実測図	28
Fig. 47. ST012 古墳測量図	28
Fig. 48. ST012 古墳石室実測図	29
Fig. 49. ST012 古墳出土遺物実測図	29
Fig. 50. ST013 古墳測量図	29
Fig. 51. ST013 古墳石室実測図	30
Fig. 52. ST013 古墳墳丘断面図	30

Fig. 53. ST013古墳出土遺物実測図	31
Fig. 54. ST014古墳測量図	32
Fig. 55. ST014古墳石室実測図	32
Fig. 56. ST014古墳墳丘断面図	33
Fig. 57. ST015古墳測量図	33
Fig. 58. ST015古墳石室実測図	33
Fig. 59. ST015古墳墳丘断面図	34
Fig. 60. SR001・002祭祀遺構出土土器実測図	35
Fig. 61. 石器・石製品・銅製品実測図	36
Fig. 62. A地区遺構配置図	40・41
Fig. 63. A地区北遺構配置図	42
Fig. 64. B地区遺構配置図	42
Fig. 65. C地区遺構配置図	43
Fig. 66. D地区遺構配置図	43

図 版 目 次

図版1. A・B地区全景
2. C・D地区、SA001・2・4支石墓、甕棺墓群
3. SJ003・5・6甕棺墓、ST003古墳
4. ST004・5古墳
5. ST005・7古墳
6. ST008～11・13古墳
7. ST014・15古墳、祭祀遺構
8～16. 出土遺物写真

表 目 次

表1. 甕棺観察表	10
表2. 石器・石製品・銅製品観察表	36

例 言

1. 本書は昭和60年に実施した私立学校（弘学館）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は松尾商事株式会社からの委託により、佐賀市教育委員会が主体となり実施した。
3. 遺構の実測、写真撮影は福田義彦が実施した。
4. 出土遺物の復元、実測、トレースなどの作業は調査員の指導のもとに佐賀市教育委員会、循環収蔵庫で行った。担当は以下のとおりである。
復元 西首金子 鬼崎玲子
実測、トレース 野中須矢 浜田糸子 香田哲子
5. 本書の執筆・編集は福田が行なった。

凡 例

1. 遺構については一連番号を付し、その前にSK（土壙）、SA（支石墓）、SJ（甕棺墓）、SR（祭祀遺構）の分類記号を用いた。
2. 遺構の法量はm単位、遺物の法量12cm単位を原則として用いた。
3. 遺構実測図および本文中の北方位はすべて座標北である。
4. 遺物実測図の中心線が一点破線は回転復元したことを表わす。

I 序 説

(1) 調査に至る経過

当地に開発計画が提出されたのは昭和59年5月のことで、当時は特別養護老人ホームを計画しているとのことであったが、その後、昭和60年2月に突如として私立学校建設計画に変更され、松尾商事より正式な協議があった。それによると中高一貫教育をめざす全寮制の学校を建設し、昭和62年度開校を予定しているので埋蔵文化財の調査をお願いしたいとのことであった。

当地は古くから埋蔵文化財包蔵地として知られており、昭和40年代には応急的な古墳の調査がなされている。その時の古墳は昭和60年現在も6基の墳丘が明確に判別でき、またそれ以外の遺構も数多く存在する可能性があり埋蔵文化財包蔵地として当地が重要な地点と考えられたので、松尾商事に対し他地域で当該事業を検討するように依頼したが、当地以外では建設は困難であるという回答であった。

そこで県教委、市教委、松尾商事の三者で協議を実施した。その結果、設計の方法により残せる古墳は極力残すということで確認調査と本調査を併行して実施するという変則調査を昭和60年8月19日より開始した。

当初、調査対象の古墳は4基であったが、表土はぎ及び踏査の結果12基となり、他に支石墓、甕棺墓、祭祀遺構等も調査することになった。この外、調査途中松尾商事が用地の追加買収をし、新たに古墳3基が存在することがわかったが、その地点は用地の西端に位置し現状保存が可能であったため調査対象から除外することになった。このような経緯で実際現状保存が可能であったのは前述の3基とA地区1・2号墳、C地区6号墳の計6基となった。

(2) 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

事務局 佐賀市教育委員会社会教育課

社会教育課長 中村 弘

社会教育課長補佐 北原 学

社会教育課長補佐 江川光男

文化係事務吏員 本告敬資（庶務担当）

同 上 福田義彦（調査担当）

発掘作業員 小柳ヨシエ、坂本雪江、小柳シゲノ、宮地峯子、原ミチエ、生田ヨシエ、生田美代子、大野道江、山本邦江、橋本絹子、広瀬トシ、村川キクエ、山田芳栗、後藤美智江、広瀬幸子、広瀬八重子、畑瀬美代子

調査協力 佐賀県教育委員会、佐賀県立博物館、松尾建設株式会社、松尾商事株式会社、新九州測量株式会社、空中写真稲富、(有)江下建設



Fig. 1 黒土原遺跡周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-------------|----------|-----------|------------|
| 1 黒土原遺跡 | 2 大門遺跡 | 3 西隈古墳 | 4 銚子塚前方後円墳 |
| 5 丸山遺跡(移設地) | 6 山王古墳 | 7 西原前方後円墳 | 8 西原古墳群 |
| 9 関行丸前方後円墳 | 10 琵琶原遺跡 | 11 東千布遺跡 | 12 久富遺跡 |
| 13 篠木野遺跡 | | | |

II 遺跡の環境

黒土原遺跡は佐賀市金立町大字金立字五本黒木にあって、脊振山系から南に派生する舌状丘陵上及び傾斜地に位置する。このような丘陵は脊振山系南麓には多数存在するが、そこには先土器時代から古墳時代の遺跡が集中している。時代が降ると、平野部が生活空間として開拓され、さらに南部地域の干拓と相まって漸次南下する傾向にある。

先土器時代

藤付E遺跡^{註1}、大和町礫石^{註2}、惣座遺跡^{註3}などがあるが、台形石器や細石刃等が検出されたのみで

遺構は発見されていない。先土器時代の中心的地域は県北西部及び多久地方といわれているが、今後調査の進展によっては当地域でも遺跡数は増加するものと思われる。

縄文時代

大門遺跡^{註4}より曾畑式土器、大門西遺跡^{註5}より三万田式系の深鉢が出土している外、丸山遺跡^{註6}の支石墓からは縄文時代晩期の土器が多量に検出されており、当遺跡の支石墓との関連が注視される。この外、遺跡南麓の六本黒木遺跡^{註7}や西方の三郎山遺跡^{註8}、久保泉町西原遺跡^{註9}でも遺物が出土している。

弥生時代

丸山遺跡^{註10}の箱式石棺や大門西遺跡の住居跡、貯蔵穴、六本黒木遺跡、東千布遺跡^{註11}の甕棺墓群、久富遺跡^{註12}の住居跡、土壇等が検出されている。又、古墳時代に多少かかる時期ではあるが、久保泉町西原の琵琶原遺跡より50軒以上の住居跡が検出され、佐賀市において現在まで調査され



Fig. 2. 東千布遺跡

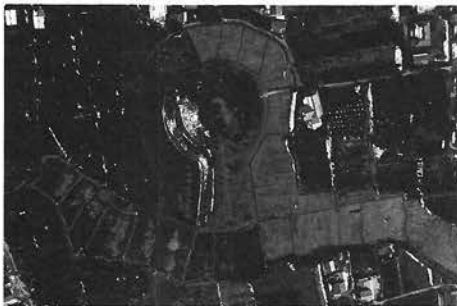


Fig. 3. 銚子塚



Fig. 4. 西隈古墳

たものとしては最大規模のものといえる。

この外、久保泉町櫟木、篠木野で甕棺墓、千布で住居跡発見の報があるが、いずれも昭和30年代の応急的な調査で、規模や詳細は不明である。

このような遺跡は舌状丘陵や、微高地に集中し、縄文期のそれらに比して爆発的に増加する。

古墳時代

佐賀市における脊振山南麓は古墳のベルト地帯の呼称を使用するに値するほど多数の古墳がある。山麓から平地になろうとする漸移地帯に佐賀市では最大級の前方後円墳である銚子塚^{註13}をはじめとして、阿蘇凝灰岩系の横口式石棺に線刻や石室に赤色顔料を塗布した西隈古墳^{註14}、石人石馬を出土した西原前方後円墳^{註15}の外、我国で初めて移設・復元した丸山遺跡^{註16}などがある。

このような古墳が点在する中、6世紀後半から7世紀にかけて脊振山南麓にはいわゆる後期群集墳が爆発的に増加していき、当遺跡のそれもその一群として位置づけられる。

遺跡周辺には大門古墳群、金立古墳群、西原古墳群、妙楽寺古墳群などがあるが、金立古墳

群はその大半を九州横断自動車道建設に伴い調査が実施されている。

墳墓以外の同時代の遺跡としては琵琶原遺跡、西原遺跡、泉三本栗遺跡^{註17}の住居跡と朝鮮式山城跡とされている帯隈山神籠石^{註18}、金立古窯跡、不動の滝古窯跡などがあるが、調査例としては古墳と比して非常に少ない。

古代～中世

律令国家時代、肥前国の中心は西接する大和町であり、肥前国府跡^{註19}、肥前国分寺・国分尼寺跡^{註20}等が調査されているが、佐賀市においては現在のところ、大規模な遺跡は発見されていない。ただ琵琶原遺跡より検出した須恵器に「稻主」と読める線刻文字があり律令時代にこの佐賀市においても何らかの遺跡があることを示唆している。

中世は考古学的に空白の時代と言ってよく、高木城跡^{註22}、蓮池上天神遺跡^{註23}など、部分的な調査例があるにすぎない。文献によると高木氏や神代氏が登場してくるが、その詳細は解明されていない。

近 世

鍋島三十五万石として著名であり、ここで説明するには及ばないと思うが、遺跡の西方に隣接して葉隠発祥の地があり、山本常朝と関連の深い宗寿庵の地名が遺存している。また二代藩主光茂夫人隠棲の地である朝陽軒も近接した地点と考えられている。



Fig. 5. 丸山遺跡



Fig. 6. 石人石馬



Fig. 7. 帯隈山神籠石

- 註1 村一義「藤付E遺跡」(『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第51集) 1980
註2 藤井伸幸「礫石B遺跡」(『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報』第5集) 佐賀県教育委員会 1983
註3 本田秀樹「惣座遺跡」(同上 第7集) 同上 1984
註4 木下之治「大門遺跡」佐賀市文化財調査報告書第 集 1973
註5 立石泰久他「大門西遺跡」(『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第51集) 1980
註6 中島直幸他「丸山遺跡」佐賀県教育委員会 1979
註7 西田和己・岩永政博「六本黒木遺跡」(『大門西遺跡』佐賀県文化財調査報告書第51集) 1980
註8 中牟田賢治・福田義彦「三郎山遺跡」(『香田遺跡』佐賀県文化財調査報告書第57集) 1981
註9 同 上 「西原遺跡」(『西原遺跡』)
註10 福田義彦「東千布遺跡」(『東千布遺跡』佐賀市文化財調査報告書第15集) 1985
註11 同 上 「久富遺跡」(同上)
註12 同 上 「琵琶原遺跡」佐賀市文化財調査報告書第13集 1980

- 註13 木下之治『銚子塚』佐賀市文化財調査報告書第 集 1976
註14 木下之治『西隈古墳』測量及び石室入口付近整備の際概要報告がされている。
註15 民家の噴石として使用されていたが、昭和59年に石人石馬として確認された。種類については、靱・
翳などいくつか論議がなされたが、昭和60年の佐賀県立博物館主催「古代史展」では盾型石製品として
紹介された。
註16 15の石人石馬を出土した古墳で前方後円墳であったといわれている。
註17 昭和61年度佐賀市教育委員会調査
註18 鏡山猛「帯隈山神籠石」(『帯隈山神籠石とその周辺』佐賀市教育委員会) 1967
註19 田平徳栄『肥前国府Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第58集 1981
註20 高島忠平他『肥前国分寺』大和町文化財調査報告書第1集 1976
註21 昭和60年に部分的な調査がなされた。
註22 昭和53年に部分調査が実施され中世の溝、土塹、柱穴を検出したが館跡などは発見されていない。
註23 福田義彦『上天神遺跡』佐賀県佐賀地区河川改修事務所 1984

III 遺構と遺物

(1) 遺跡の概要

遺跡は古墳群を中心に見て4地区に分かれたのでそれぞれA～D地区と称し、調査を実施した。

A地区は西部の舌状丘陵で、水田との比高は中央部で約5mを計る。標高は丘陵先端で40m、基部で50mを測り、南北長100m、東西長25m程度を調査範囲とした。検出遺構としては支石墓1基、甕棺墓1基、古墳8基(内1基は竪穴式)、祭祀遺構2基を検出した。

B地区はA地区より約30m程度東に位置する舌状丘陵で、標高は34m～38mを測る。発掘前はA地区のように墳丘の確認できる古墳は全くなかったが、表土はぎ後、腰石のみの古墳3基、甕棺墓6基、支石墓7基+ α を検出した。

C地区はB地区の位置する丘陵基部よりさらに一段高くなっている所でやや緩傾斜地にある。検出遺構は古墳2基のみであるが、内1基は今回の造成工事地区外にあたるとのことで、5号墳1基を調査対象とした。

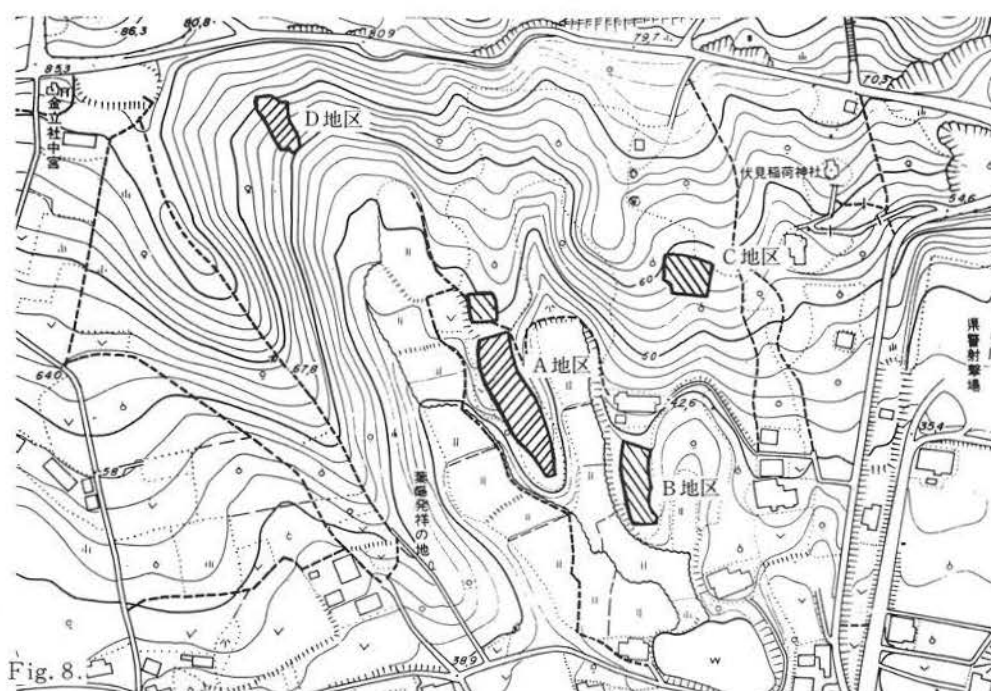
D地区は調査の後半に踏査によって発見したものでA地区丘陵基部より谷を一つへだてた北西方向約50mにある。D地区は調査区の中で最高の標高を測る。古墳2基を検出したが、内1基は半壊の状態では若干の盛土が確認できた。

(2) 支石墓

A地区で1基、B地区で7基+ α 検出した。掌石、支石が削平をうけたとみえ、一見石蓋土塹のように見うけられるので支石墓の名称を用いるのには若干のためらいはあるが、供伴土器やその年代、器種が丸山遺跡、礫石遺跡のそれと共通していると考えるので支石墓として取扱った。

SA001支石墓

SA001支石墓はB地区南端のST008古墳の西部墳丘下にあつて、SK002を切っている。また北3mにはSA007があつて主軸が平行している。



掌石、支石は完全に除去され、2個の蓋石と下部の遺構を検出した。蓋石は幅0.3~0.4m、長さ0.85m~0.94mを測り、花崗岩質でやや厚みのあるものを用いている。

墓坑は長さ1.48m、幅0.66m、深さ0.6mを測り、上面の平面形は隅丸長方形を基調としている。

墓坑内には北壁部に長さ1.3m、幅0.6m、厚さ0.04mの板石を検出した。板石下部は0.1m程度埋め込まれている。床面はほぼ平坦で、壁は東西がほぼ垂直に、南北が角度をもって造られている。

遺物は西壁寄りで長さ0.4m付近から壺形土器の完形器を一個体、破片を一点検出した。レベル的に見て当遺構に伴うものとする。

出土遺物 (Fig. 9)

1は完形品の壺で口径6.6cm、器高8.4cm、底径3.0cmを測る。最大径は胴部にあり、9.8cmで底部は丸底に近い平底である。口縁外面と頸部に一条の沈線

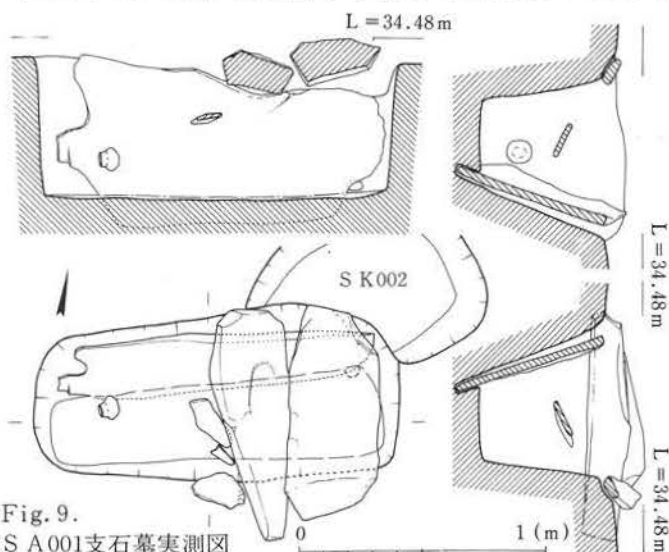


Fig. 9.
S A 001支石墓実測図

を有し、口縁には焼成前の穿口を対角にもつ。調整は主として外面をへらミガキ、内面ナデとへらミガキを施している。全体的に器壁はうすく、焼きは良好である。色調は淡茶褐色で胴部と頸部の一部に黒色部分を有する。2は壺の胴部小片である。胴径は反転復元、角度は1に準じて図化した。調整は内外面共にへらミガキを施している。胴部外面に一条の沈線と山形状の沈線を有し、その周囲には径1mmほどの刺突文がめぐる。色調は外面淡褐色、内面淡橙色。

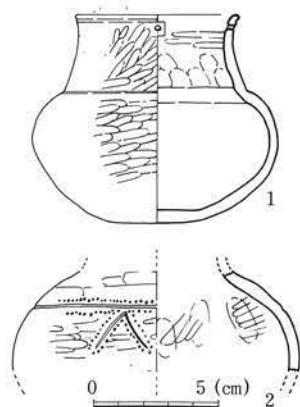


Fig. 10.
SA001支石墓出土土器実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

S A002支石墓

B地区中央の支石墓群中において、蓋石より下部を検出した。蓋石は花崗岩質のもの2枚、緑泥片岩質のもの3枚、計5枚を用い、その下部にさらに小ぶりの板石を2枚敷いている。墓坑は中央幅で東西1.26mを測る。墓壇は中央幅で東西1.26m、南北0.53mを測り、上面の平面形は隅丸長方形を基調としている。深さは中央部で0.3mを測り、底面は平坦である。遺物は何も検出していない。

S A003支石墓

A地区先端において、S J 006と近接している。上層部を削平、攪乱されており、墓壇上面及び内部で検出した石材は蓋石又は支石であったものと考えられる。石質は花崗岩系のものと緑泥片岩系のものがある。墓壇の上面の平面形は北部を攪乱されているが、長楕円形を呈し、中央部で東西1.58m、南北0.68m、深さ0.5~0.55mを測る。床面はゆるやかな起伏があり、壁は角度をもって立ち上る。遺物は土器細片を検出したが、器種・時期の比定もできかねる程のものであった。

S A004支石墓

S A004支石墓はB地区において、周辺にはS A002、005~007支石墓が東西に連なり、その西端に位置する。

掌石、支石は完全に除去され、東壁の小口石のみを検出した。幅0.28m、高さ0.35mで花崗岩質の偏平な石を使用している。

墓壇は中心部で東西1.39m、南北0.6m、深さ0.4m

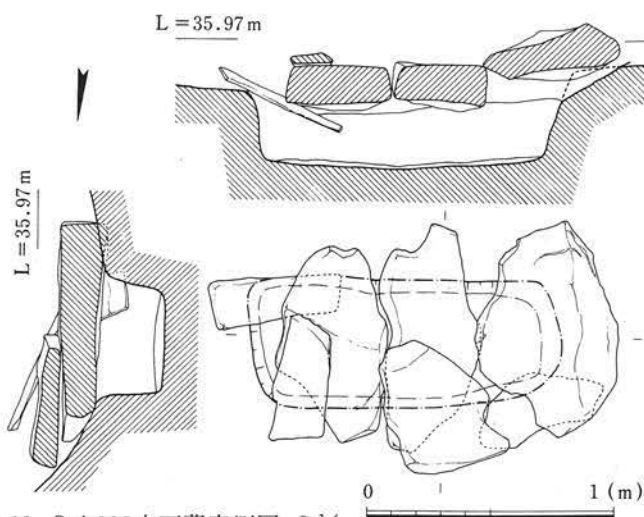


Fig. 11. S A002支石墓実測図 S $\frac{1}{30}$

を測り、上面の平面形は隅丸長方形を基調としている。床面はわずかに舟底状を呈し、中心部で標高は36mを測る。

遺物は西壁寄りに壺形土器を1個体分検出した。床面から0.2m程度浮いた状態で検出したが、当遺構に伴うものとする。

出土遺物

3は口径11.2cm、器高13.9cm、底径5.6cmを測る。口唇部

は外反し頸部に2条の沈線を有する。肩部の張りが著しく胴部は直線的である。器面の調整は主としてヘラミガキ、ナデによる。色調は淡橙色で、胎土に0.1~0.3cm程度の砂粒を多く含む。

その他の支石墓及び土墳

B地区内に上記の外にS A005~008の支石墓が存在するが、掌石、支石、側石等を全く検出しなかった。法量は東西1.22~1.45m、南北0.53~0.78m、深さ0.21~0.54mを測る。上面の平面形は隅丸長方形を基調としているが、検出レベルで多少の差位は認められる。遺物についてはS A008で管玉を1個検出した。法量は長さ1.4cm、径0.5cm、穿口径0.25cmで双方からの穿口である。材質は蛇紋岩系か。

S K001はB地区中央西端にあって上面の平面形は楕円形を基調とするものである。長径1.22m、短径0.52m、深さ1.4mを測る。支石墓の上部構造を削平されたものの可能性もあるが、壁の角度が

他の支石墓のものとそぐわない。遺物については中央部で壺を1個検出した。4は口径5.9cm、器高10cm、底径4.7cmを測る。頸部外面に三条の沈線をめぐらし、その下位に連弧文を配する。調整については磨耗が進んでおり明確でないが、一部にナデ調整が見うけられる。色調は淡褐

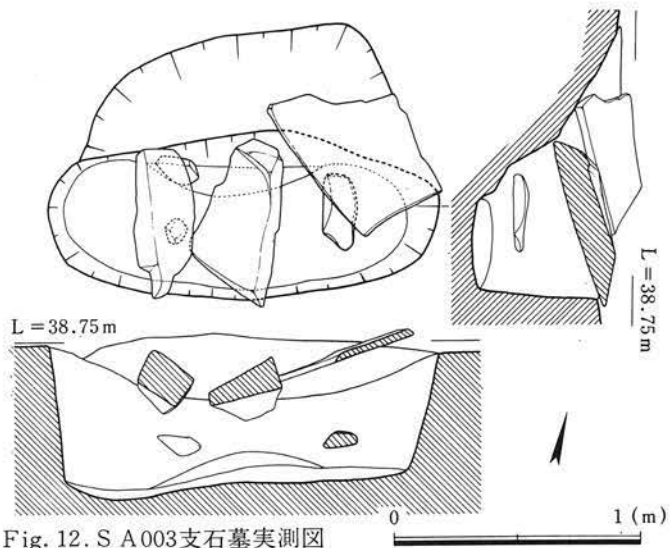


Fig. 12. S A003支石墓実測図

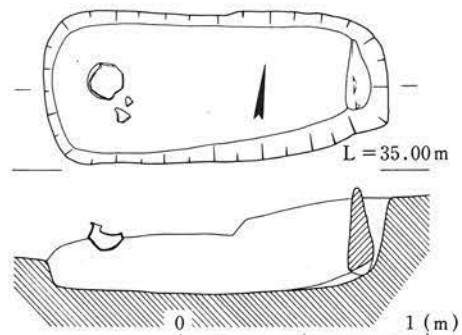


Fig. 13. S A004 支石墓実測図 (S = 1/30)

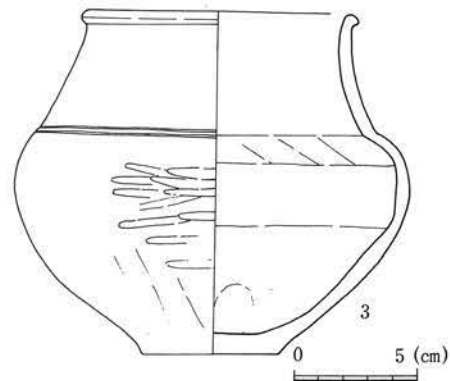


Fig. 14. S A004出土土器実測図 (S = 1/3)

色で胎土は砂粒多含。底部は上げ底気味の平底で、肩部が発達している。頸部は「く」の字状

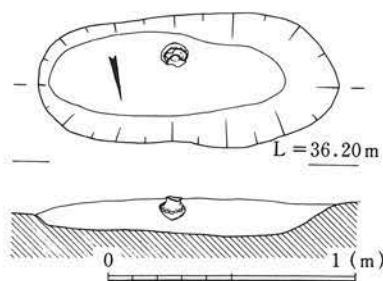


Fig. 15. S K001土壌実測図 (S = $\frac{1}{30}$)



Fig. 16. S K001土壌出土土器実測図 (S = $\frac{1}{3}$)

にくびれ、そのため内面に稜を形成している。口縁部は外反する。

S K002土壌はB地区南端にありS A001に切られている。(Fig. 9. 参照) 上面の平面形は楕円形を

基調としたもので長軸1 m程度、短軸0.7 m程度、深さ0.2 mを測る。出土遺物は鉢形土器片を1点検出した。5は復元径30.5 cmを測り、口縁内外面に1条の沈線を有する。器面の調整は内外面共に主としてヘラミガキ。色調は茶褐色で焼きは良好。

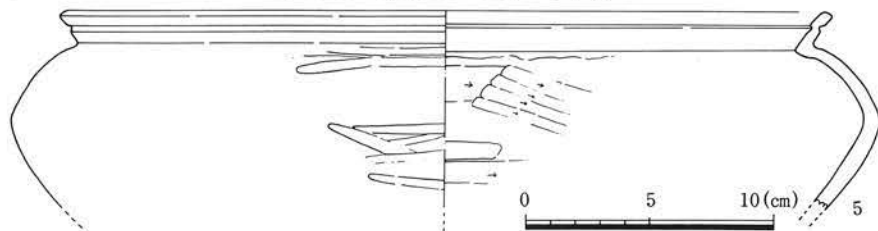


Fig. 17. S K002出土土器実測図

(3) 甕 棺 墓

A・B地区で検出し、主にB地区中央に集中する。A・B地区合計6基を検出したが、表土下層や古墳周溝から検出した土器片を含めると、少なくとも10基程度存在していたものと推定する。検出したもののすべてが、古墳築造及び果樹園開墾時に上部構造を破壊されており、複式棺であることは認められるものの組合せの様式はあまり明確でない。今回検出した甕棺墓のうち、比較的残存状態の良好なものを抽出し、後述する。

S J001甕棺墓

B地区中央の甕棺墓群・支石墓群中に位置する小児用複式棺である。上半部を破壊されているが、掘込みの上面の平面形は楕円形を基調としたもので、長径1.28 m、短径0.87 m、深さ0.28 mを測る。上甕に鉢形の土器？ 下甕に壺形土器を用い、埋置形態は覆口式である。接合部下に拳大の自然石を置き、角度の補正をなしている。主軸方向NE-63°。他の遺物については上・下甕の破片の中から小型の壺を検出した。副葬品であったものとする。

S J003甕棺墓

B地区の甕棺墓群中に位置する小児用複式棺である。南1 mにS A002があり、SJ008古墳の墳丘下位にあたる。上半部の破壊がすすんでいるが、墓坑上面の平面形は楕円形を基調とし

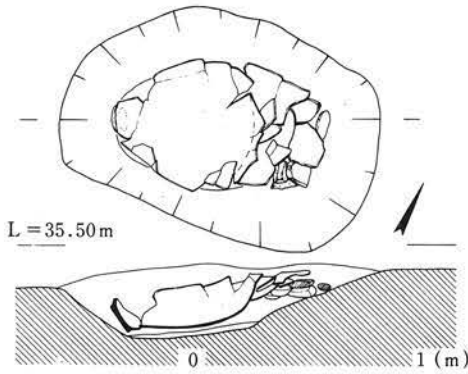


Fig. 18. SJ001 甕棺墓 (S = 1/30)

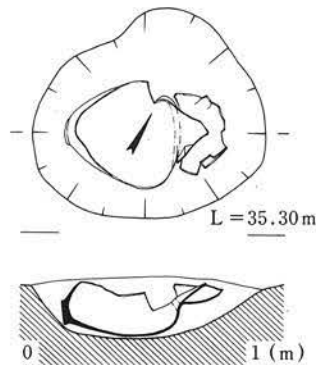


Fig. 19. SJ003 甕棺墓 (S = 1/30)

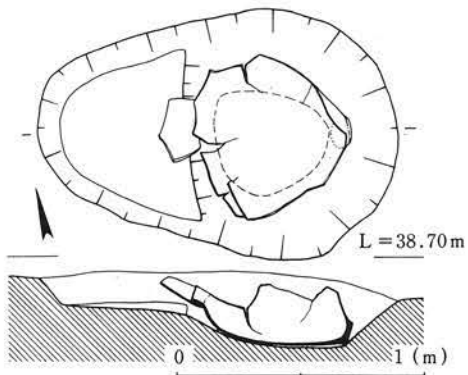


Fig. 20. S J 005 甕棺墓 (S = 1/30)

ていたものと考え
える。中央部で
東西0.95m、最
深部で0.25m
部で0.25mを測
る。上甕に鉢形
土器?、下甕に
壺形土器を用い、
埋置形態は覆口
式である。主軸方位NE-60.5°。

S J 005甕棺墓

A地区南端に位置し近接してSA003がある。墓
坑上面は上甕埋置部分と下甕埋置部分では段差が
ある。埋置形態は上甕に鉢形土器?、下甕に壺形
土器を用いた覆口式である。主軸方位ES-13°。

甕棺墓より出土した主な土器の観察を下記表に
して概略を記す。なお、その他の甕棺は残存状態
が悪く復元が困難であったので省略した。

表1. 甕棺観察表

(単位: cm)

番号	名称	器種	法量	形態の特徴	技法の特徴
6	SJ001 (上)	壺	胴径 35.8	胴部のみ残存している長胴の 大形壺である。	内外面は丁寧なへう磨きを施して いるが磨減が進んでいる。胎土は 砂粒まじりで、淡赤褐色を呈する。
7	SJ001 (下)	〃	胴径 39.4 底径 14.2	口頸部が発達した長胴の大形 壺で頸部は内傾しながら口縁 部へのびる。 肩部は比較的強く張り頸部と の境に凹線がみられる。	内外面共にへう磨きを施してあ るが、風化が進んでおり明確で はない。 胴下半部は斜めから縦方向のへ う磨きである。
8	SJ003 (下)	壺	胴径 38.6 底径 12.5	長胴の大形壺で肩部に強い張 りがある。底部は平底でやや 外側に突出する。	主としてへう磨きによる調整で ある。 底部外面に強いナデがある。
9	SJ004 (上)	〃	胴径 44.2 底径 9.3	胴の張りが強い壺型土器であ る。底部は平底で器壁は薄い。 胴部中央に焼成後の穿孔有り。	内外面共に丁寧なへう磨きであ る。外面は横方向、内面は横方 向及び斜め方向のへう磨きであ る。

10	SJ004 (下)	〃	胴径 57.0 底径 12.9	発達した胴部を持つ大型の壺形土器である。中央部に焼成後の穿口を有し、底部は上げ底気味の平底。	外面は横方向と斜め方向のへう磨きがある。底部外面には強いナデがある。
11	SJ001 供献	小型壺	口径 9.5 胴径 14.0 器高 15.0 底径 5.4	器高の割合に頸部が長い。肩部は突出して、わずかに稜を形する。底部は丸底気味の平底。	外面は主として横方向、頸部内面は縦方向、胴部は横方向のへう磨き、口縁部はヨコナデを施している。

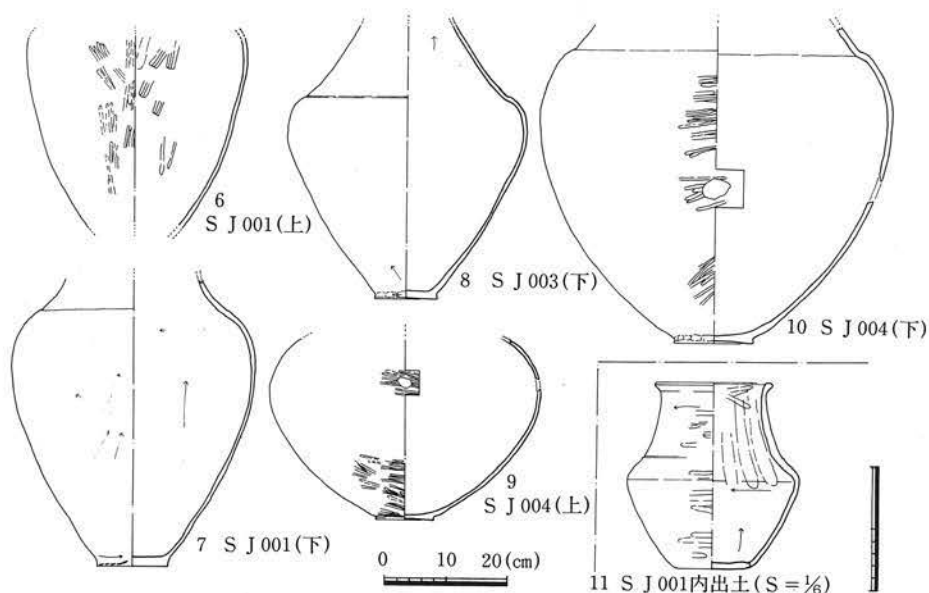


Fig. 21. 甕棺実測図 (S = 1/2)

(3)古 墳

A～D地区において15基検出し、その内12基を調査の対象とした。すべて円墳であり、主体部はST007古墳をのぞいて横穴式石室であった。墳丘規模は現状で径4～10mを測る。ST003・004・005古墳については一部墳丘の削平があるものの、その大半は旧状を呈しており盛土の状況も観察ができた。また周溝については昭和40年代の調査では存在しないものとされていたが、今回の調査でST012・013古墳をのぞいてすべてに検出した。当地区が傾斜地であるため周溝は一巡しておらず、その多くが馬蹄形を呈する。またST002～5古墳の周溝については山側に、わずかではあるが突出した部分があり注視される。

遺物については古くから開口していたST002～6古墳については石室からは全く検出できなかった。遺物の量が多かったものはST003・005古墳であり昭和40年代に調査が及んでいなかった羨道端部から墓道にかけて検出した。またST004・7・8・9古墳の周溝より土師器及び須恵器を若干検出した。

S T 003古墳

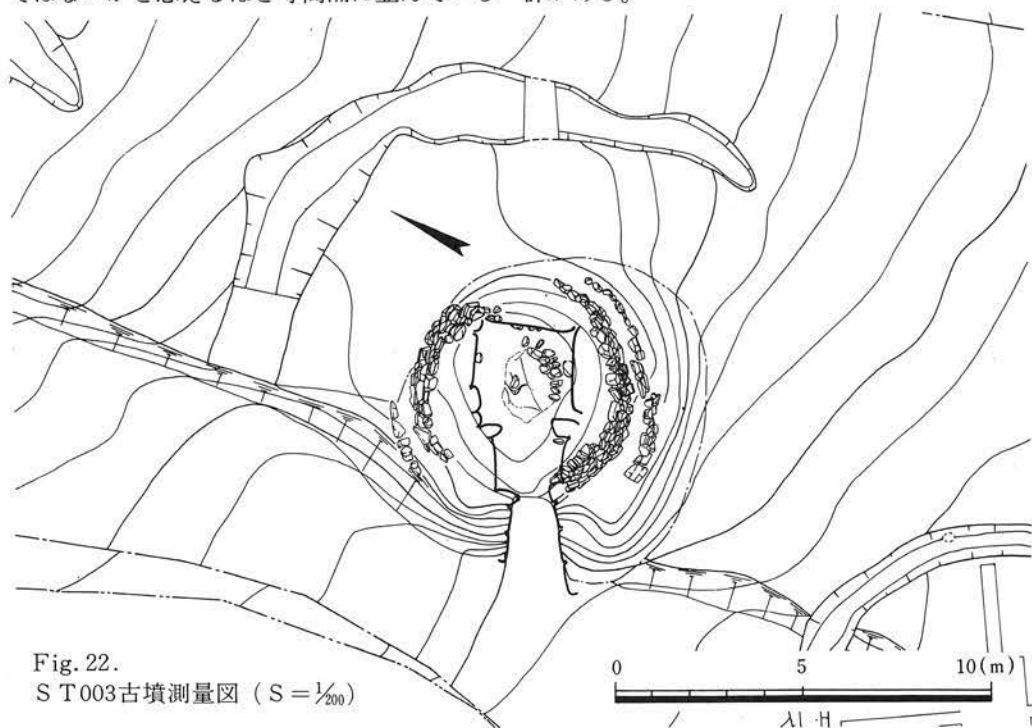
S T 003古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳でA地区中央に位置し、床面標高は約48mを測る。北にS T 004古墳、南にS T 007古墳がある。盗掘をうけているが残存状況はきわめて良好である。

墳丘 周溝は幅1.8m、深さ0.3~0.1mで墳丘の北西部から東部に延びているが地形の関係から元来一周していなかったものとする。墳丘はいわば二段構築状を呈し、周溝から2~3mまではゆるやかな傾斜であるが、葺石部分より急角度をもって立ち上る。葺石は二段に分けて配置されており、傾斜関係で北側の方が高く積んでいる。墳丘径は外径11m、内径(石室の中心から葺石最下部までの径)8mを測る。版築は比較的細かい単位でなされているが、全体的に黄褐色土を多く使用しているため層位的な識別が難しい。

石室 複室の横穴式石室からなり、玄室長2.6m、幅2.55m、前室長1.7m、幅1.25mを測る。玄室はプランは正方形に近い形状で、腰石には高さ1.2m程度の巨石を使用し、持送りで天井部を形成している。床面は玄室は平坦であるが、前室はそれよりやや低くなっている。

前庭部は西方に大きく広がり、深さは中心部で0.1~0.3mを測る。閉塞石はミカン園造成の際除去されたらしく、ほとんど検出できなかった。

遺物 盗掘墳であるため石室内部からは全く検出しなかった。前庭部からは須恵器環・高坏・甕・土師器環、鉄器(馬具)を検出した。中でも須恵器環の数個は原位置を保っているのではないかと考えるほど等間隔に並んでいる一群がある。



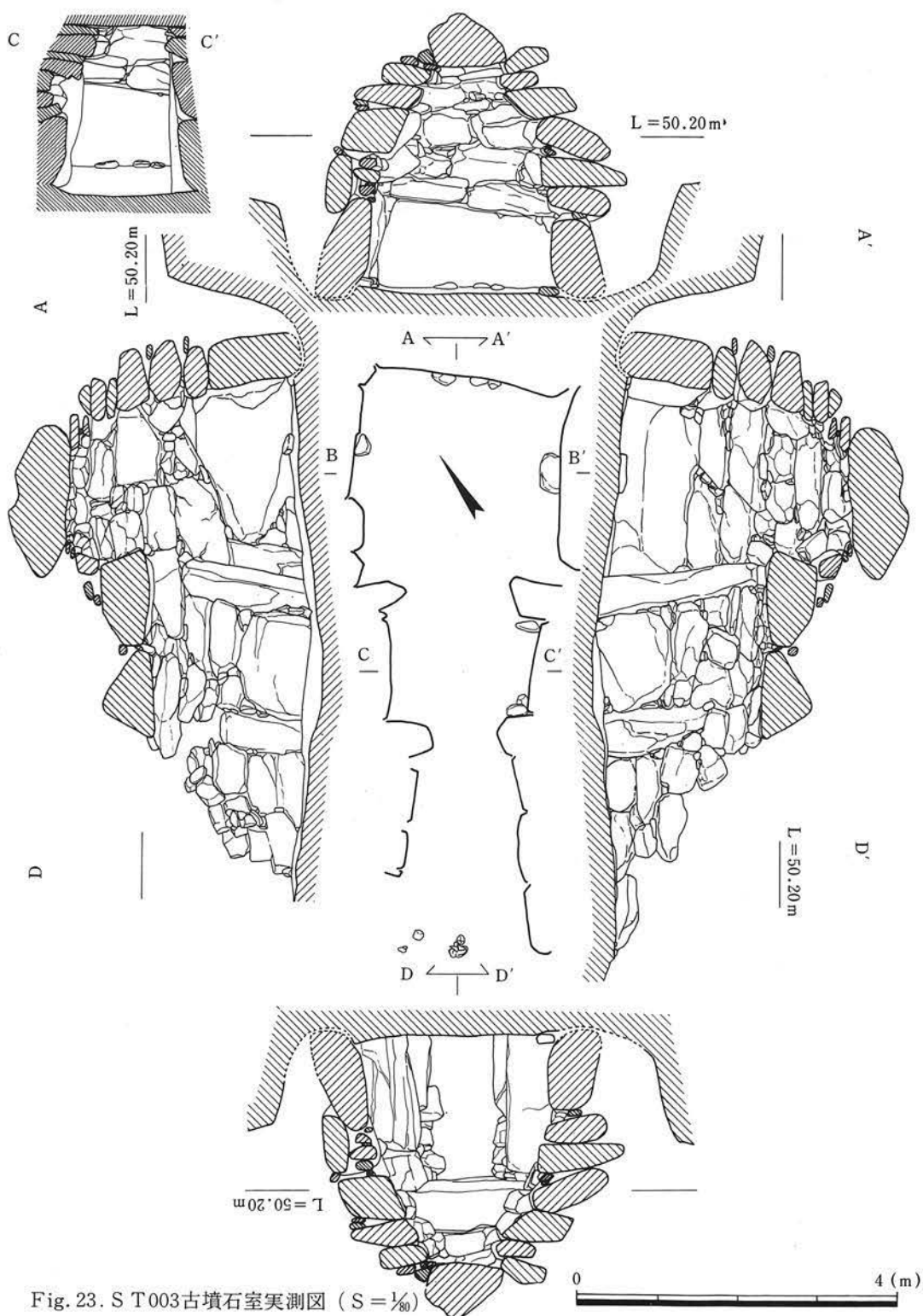
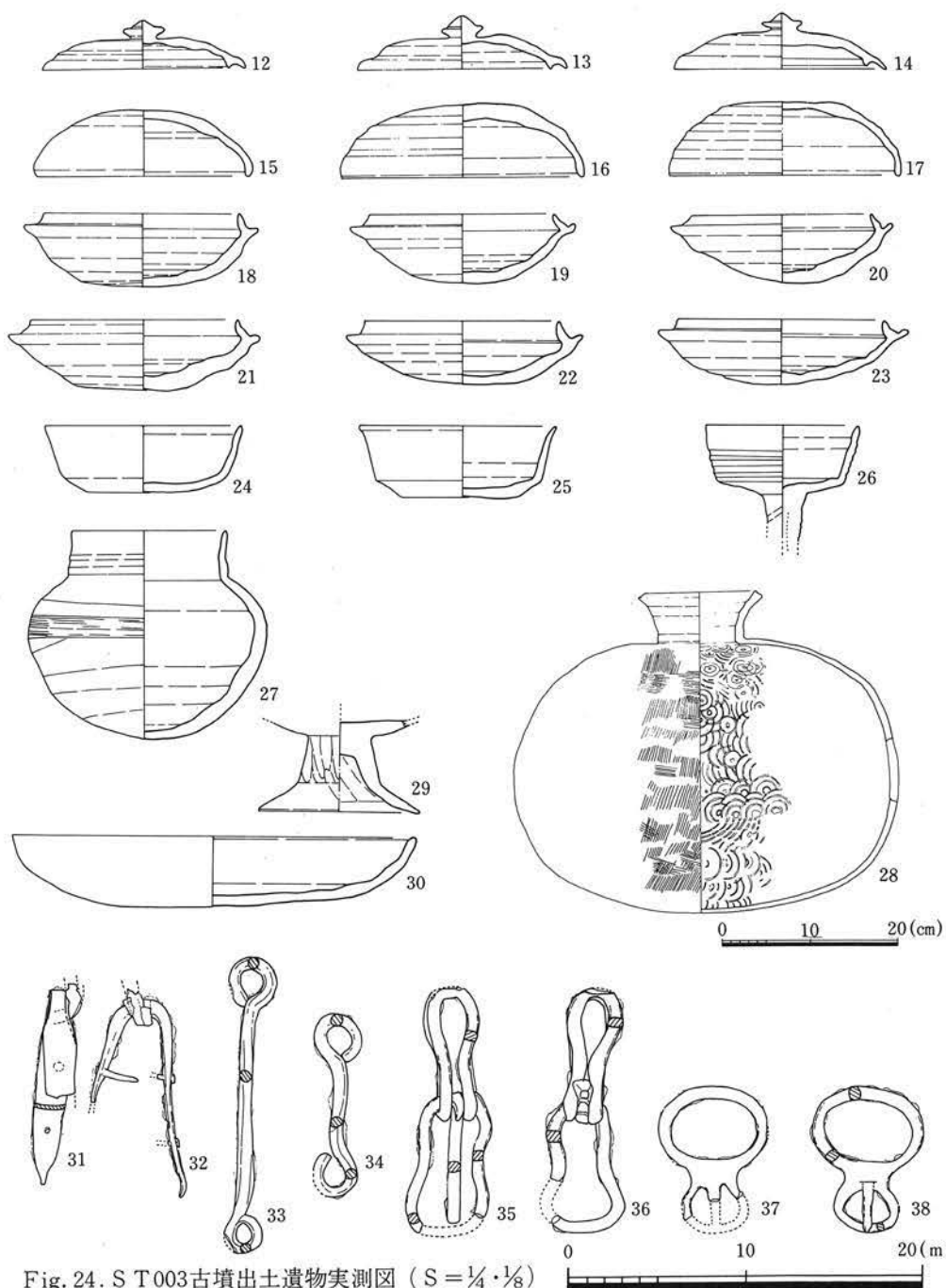


Fig. 23. S T003古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{80}$)



出土遺物

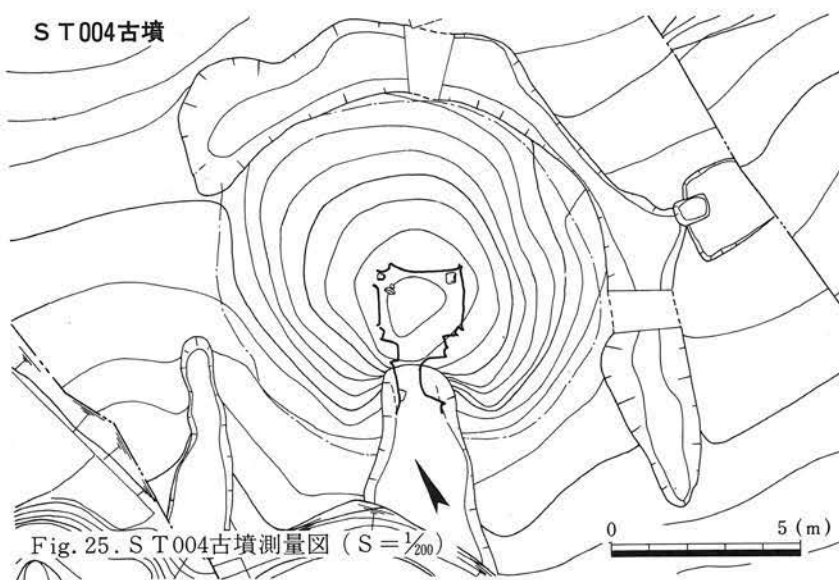
須恵器 坏身、坏蓋、高坏、短頸壺、甕が見られる。12～14は擬似宝珠のつまみを有するもので、天井部はわずかな丸みをもつ。口径11.4～11.9cm、器高2.8～3.2cm。天井部外面にへラ記号を有する。15～17は返りのない坏蓋で天井部はドーム状を呈し、口径11.8～13.5cm、器高3.75

～5.1cm、18～23は返りを有する坏身で、口径10.1～11.6cm、器高3.6～4.1cmを測る。底部が平坦なるものと多少突出するものとがあるが、墓道内においても、石室に向かって左側壁寄りに人為的な配列を思わせる出土状況を呈する坏の一群と、墓道端部より一括して出土した横瓶や短頸壺、高坏、細片の坏などの一群とにグルーピングができ、2回以上の追葬が認められる。24・25は平坦な底部をもち口縁部は外反気味に立ち上る。27は最大径を胴部中央にもつ短頸壺で口径8.9cm、器高11.8cmを測り胴下半部にはヘラケズリを有する。28は横瓶である。口径は12.5cm、器高36.4cm、胴部最大幅43.8cm、最小幅31.2cmを測る。頸部、口縁部ともに外反する。両側面とも球状をなすが、一側面がやや平坦である。

土師器、高坏、坏があるが、須恵器に比して少量である。29は坏部は欠失しているが、脚すそで径9cmを測る。脚柱部は縦方向のヘラケズリ調整がある。精製された粘土を使用し、色調は淡橙色で風化が著しい。30は口径22.8cm、器高4.1cmを測る大型の坏で外面にヘラ状工具によるナデを有する。口径22.8cm、器高4cm、底径14.1cmを測る。色調は28同様の淡橙色で精製された粘土を使用している。

鉄器 馬具各種を検出した。墓道中央部より比較的まとまった状態で検出したが、この鉄器周辺はあまり土器は検出していない。地表下20～25cmの地山直上に位置していた。32は鍔金具で墓道中央部の最下層より出土した。木製壺鍔の上端について鍔軋に連結されるもので断面長方形部分をコの字状に曲げ、下方になるにつれて広がり、先端部は双方共に鋭角をなす。径2～3m程度の鍔を中央よりやや上部に打ち込み強化を図っている。全長12cm、中央部で幅4.5cmを測る。31～36は轡の一連のセットであり、欠落して検出したものの同一轡のものとする。37・38は鏡板で全長8.4cm、上部環状部幅3.6cm、下部環状部幅6.2cmで断面は隅丸長方形に近い形状を呈する。

ST004古墳



ST004古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳でA地区北部に位置し床面標高は約45.8cmを測る。北にST012古墳、南にST003古墳がある。盗掘墳で前室部分の一部崩

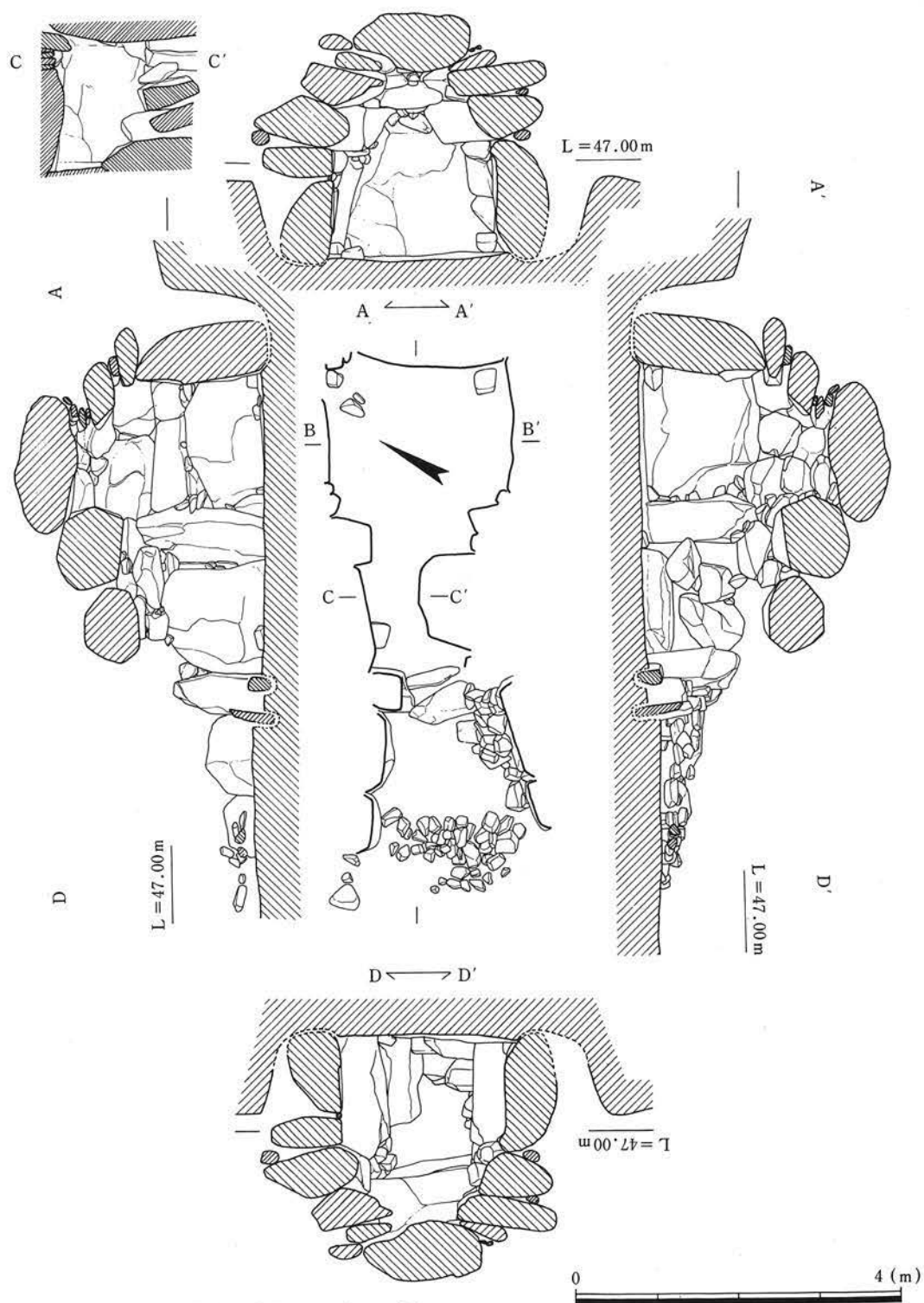


Fig. 26. S T 004古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{80}$)

壊があり、墳丘はST003古墳に比するとややおちるが、比較的良好な残存状況である。

墳丘・周溝

東部から西南部にかけてめぐる。ST003古墳の周溝同様、一巡せず、馬蹄形を呈している。深さは西南端の最深部で20～25cmを測るが、概ね10cm内外である。墳丘は当調査区では残存状況が良好の方である。地山整形をした上で墳丘を構築している。

石室 複室の横穴式石室からなり、玄室長2.05m、幅2.24mを測る。前室は東壁がくずれているので幅は不明であるが、奥行は1.2mを測る。羨道部には閉塞石が残存していた。

遺物 周溝から須恵器（坏）、墳丘から土師器を各種検出した。墳丘下部に埋置された状況で検出した土師器も3～4点検出したが大半は封土中よりのものである。

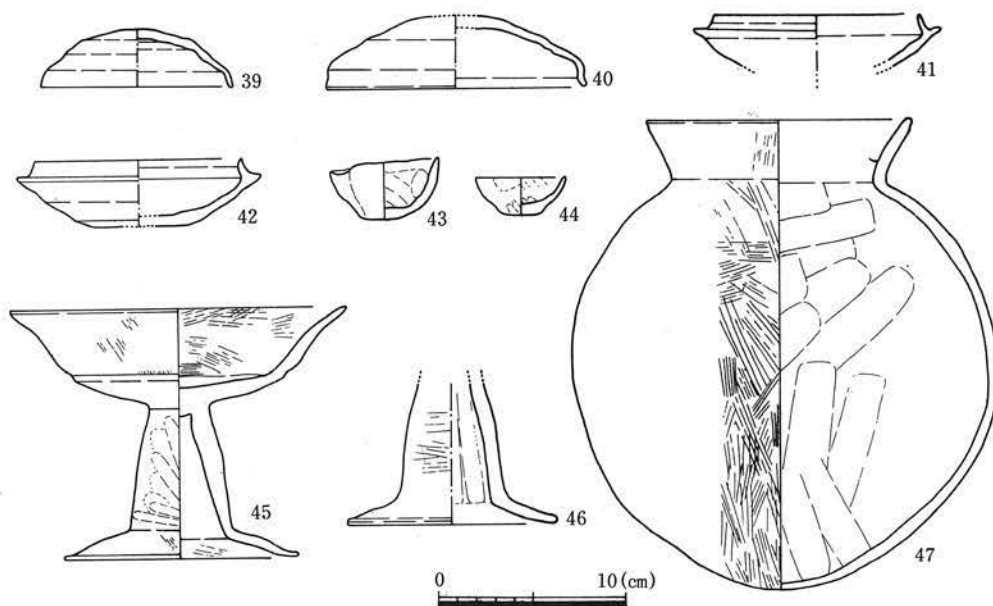


Fig. 27. ST004古墳出土土器実測図（ $S = \frac{1}{4}$ ）

出土遺物

須恵器 坏身・坏蓋を検出した。39・40は口縁部が屈曲するものである。外面天井部はヘラケズリを施している。41・42は口縁部に短い反りをもち底部外面は平坦である。底部外面はヘラケズリのあとナデを施している。

土師器 手捏土器、高杯、甕形土器である。43・44は手捏土器である。指頭圧とナデによっている。底部は丸みをおびた平底。45は高杯の脚部。外面脚柱部はハケ目調整後ヨコナデ、ナデを施している。脚柱部は丸みをおび、鋭角に曲る裾部へとつづく。裾部は端部近くでさらに水平となり接地面が増す。46・47は封土下に埋置された状況で検出した。46はわずかに内湾する口縁部をもち口唇部は丸みをおびる。調整は口縁部が内外面共にヨコナデ、胴部が、外面ハケ目調整、内面ヘラケズリを施している。47は46よりやや小ぶりで肩部があまり張らない

もので底部は丸底。口縁部外面はハケ目調整の後ヨコナデ。胴部は外面縦方向のハケ目、内面はヘラケズリ。

ST005古墳

ST005古墳はC地区にあって、横穴式石室を内部主体とする円墳である。東方約30mに今回調査対象外の古墳であるが、ST006古墳がある。当古墳は金立山から南方に延びる丘陵の、傾斜が一段緩くなっている所にあり、当遺跡で最大の規模を有する古墳である。また、この古墳は民間信仰の場として二次的に使用されており、玄室には朽ちた祭壇や石積みがあり、羨道から墓道にかけては玉ジャリが敷かれていた。石室入口の天井部前面には無想居の文字が彫刻されている。

墳丘 北部墳丘が幅2mほど垂直に削平されており、横から見ると野球帽のような形状を呈する。径は約14m、高さ3.2mで、西南部より東部にかけて幅1.2~1.5m、深さ0.2~0.3mの周溝がめぐる。墳丘西部に径10~20cm程度の花崗岩質の石が十数個認められるが、元来葺石がめぐっていたものかも知れない。

石室 前室と玄室の複室からなり、玄室幅2.3m、長さ2.2m、前室幅1.8m、長さ1.8mを測

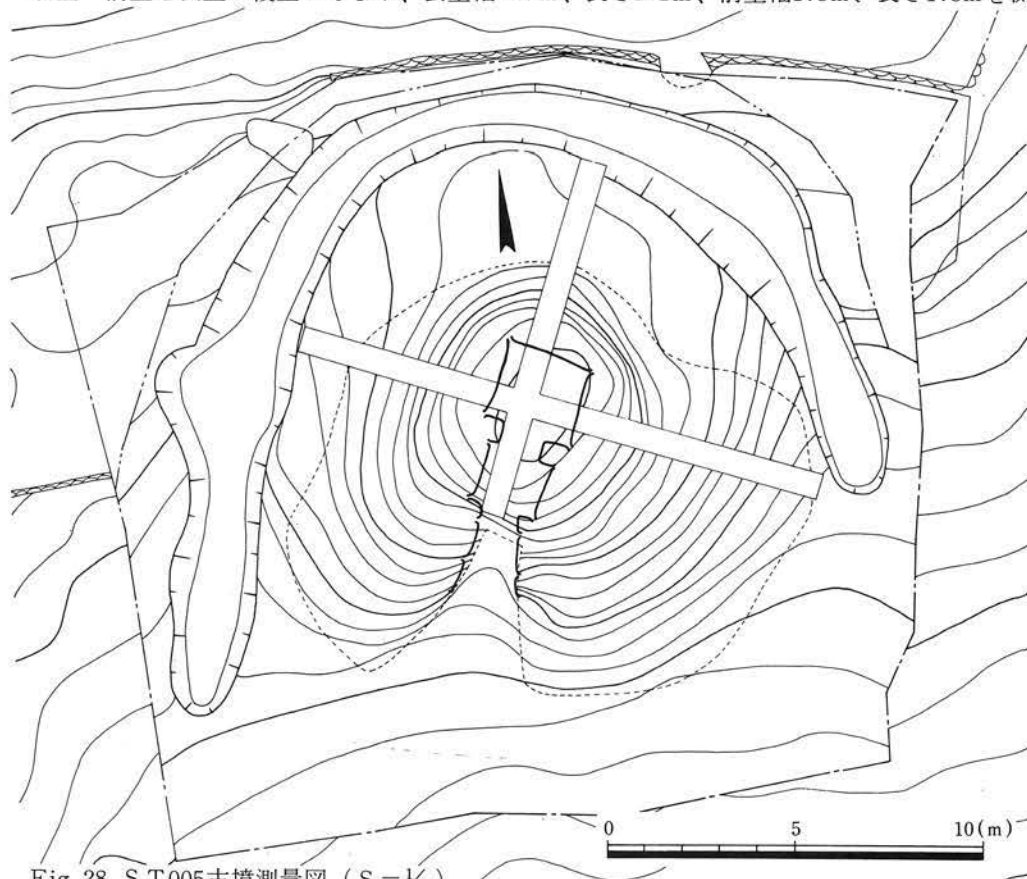


Fig. 28. ST005古墳測量図 (S = 1/200)

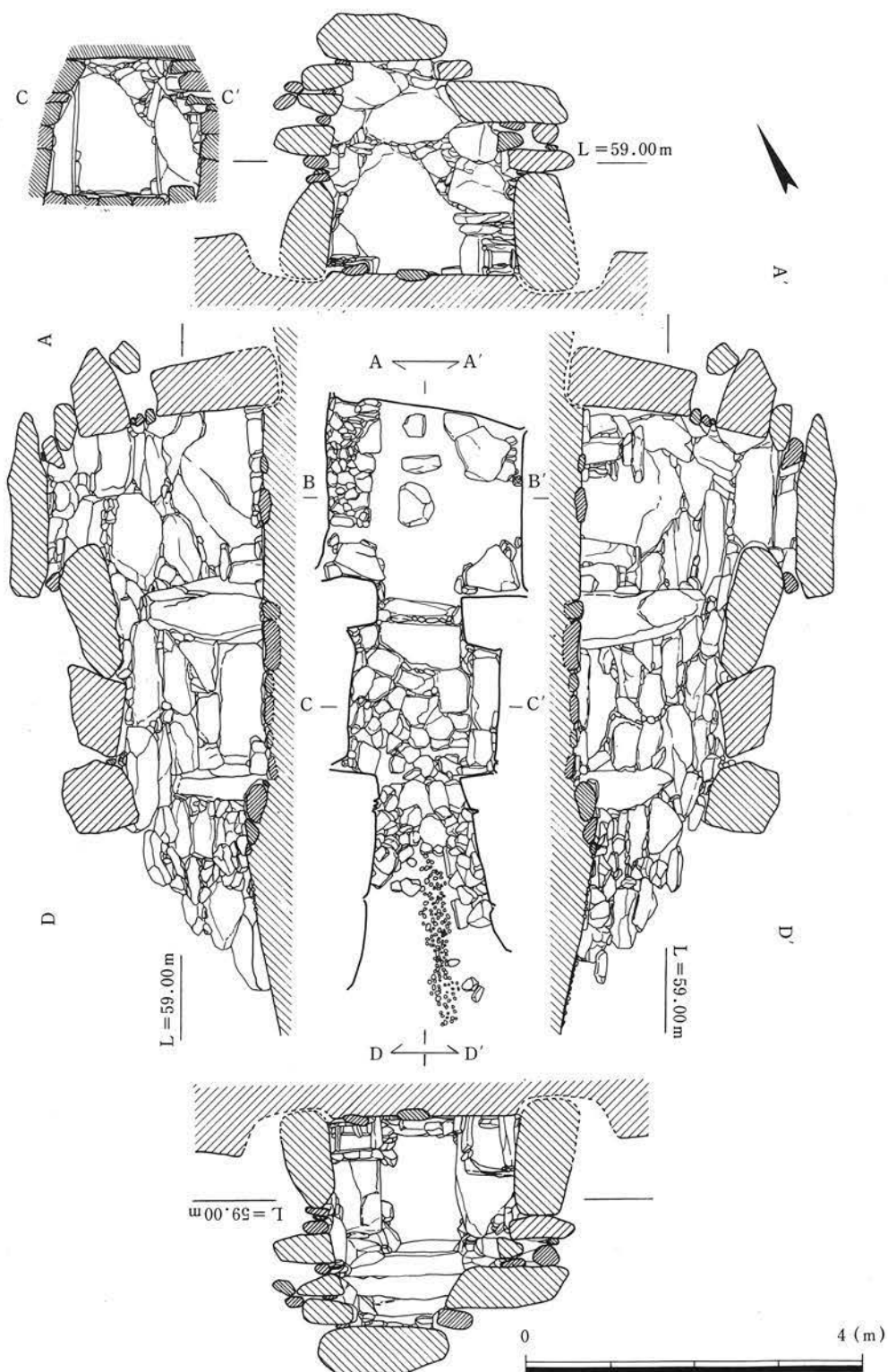


Fig. 29. S T005古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{80}$)

る。玄室の西壁に沿って幅0.6m、高さ10cm程度の石敷部分があり屍床と考える。石障となるべき板石は屍床の南端と東壁の北部と南部に検出したが、いずれも二次使用の際移動されたものである。床面はほぼ平坦で敷石はない。中央に飛石状にあるものは後世に置かれたものである。

前室にも東西両壁に屍床があり、高さ10cm、幅25～30cmを測る。床面は10×10cm程度の偏平な板石を敷きつめている。

羨道部には二次使用による玉ジャリが敷かれていたが、これを除去すると閉塞石を多数検出した。閉塞石下層には東壁寄りに幅50～60cm、厚さ10cmを測る粘土を検出した。

遺物 周溝の西南隅、前庭部、羨道閉塞石間より多数検出した。器種としては須恵器坏・高坏・甕・甗、土師器坏等がある。

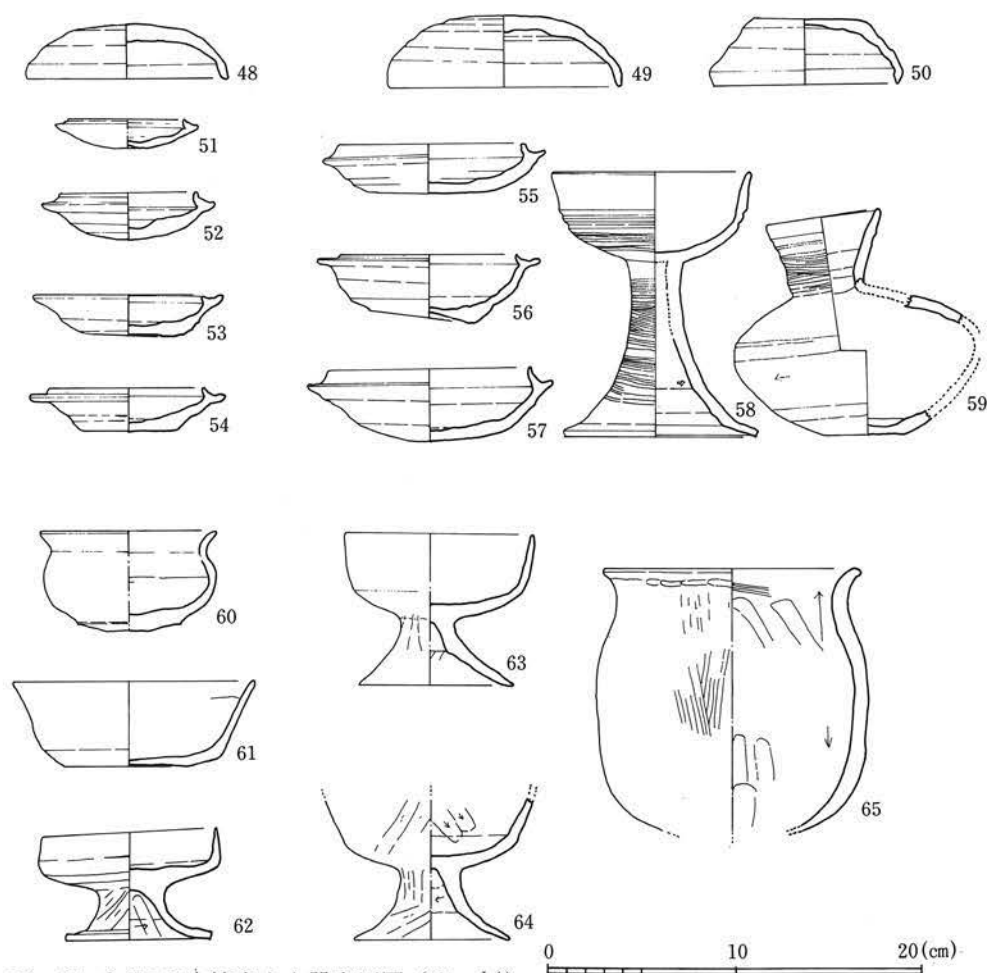


Fig. 30. S T 005古墳出土土器実測図 (S = 1/4)

出土遺物

須恵器 坏身・坏蓋、高坏、横瓶がある。48・49は天井部外面はヘラケズリが施され、口縁

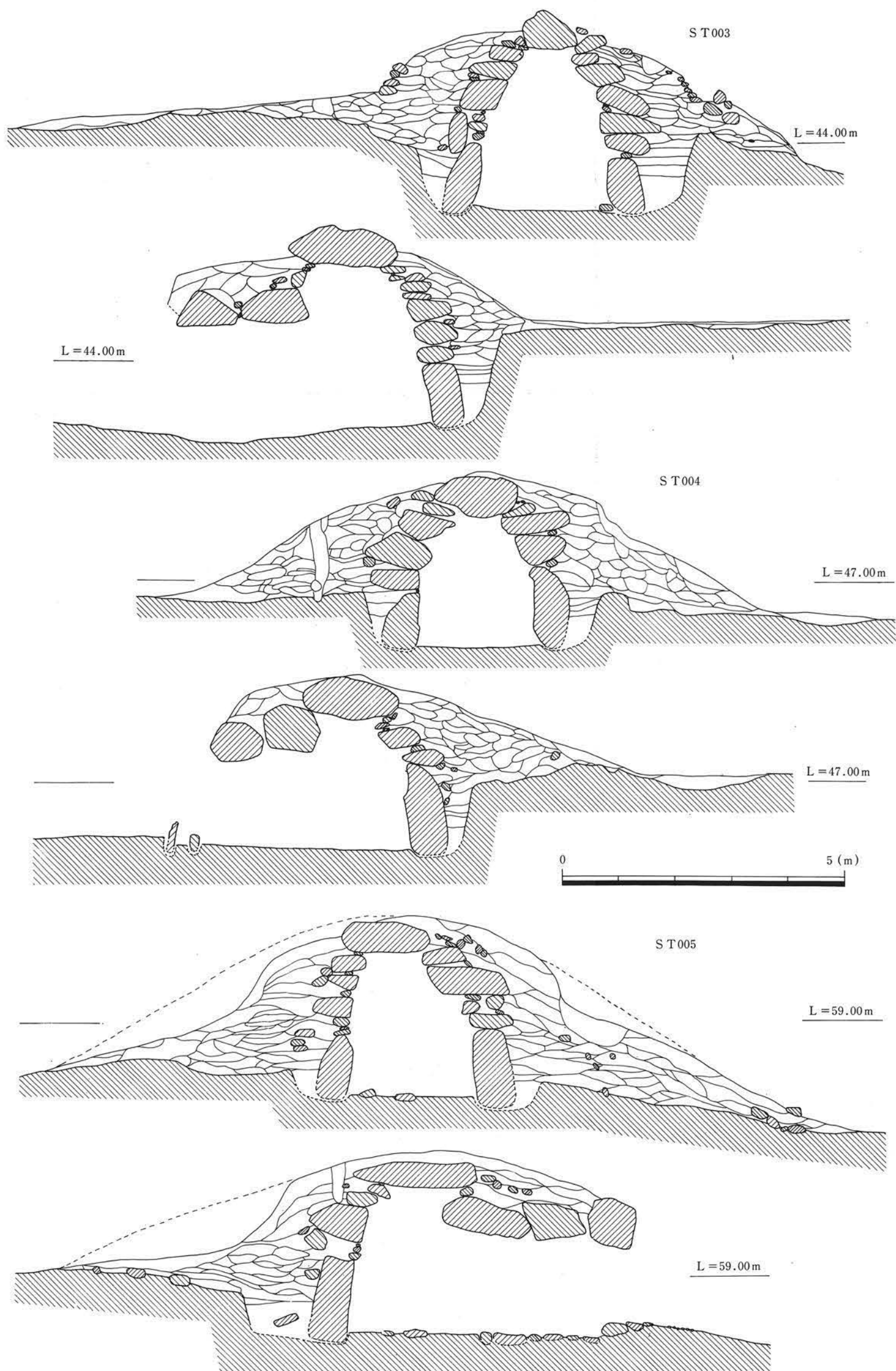


Fig. 30-1. S T003, 004, 005墳丘断面図 ($S = \frac{1}{80}$)

端部は直線的にのびる。50は天井部外面がヘラケズリのあとナデが施されたもので平坦になっている。51～57はすべて墓道埋土中及び底面より検出した。法量の差もまちまちであるが、外面底部にヘラケズリの後ナデを施したものと、ヘラケズリのみのものがあある。58は口径9.75cm、器高13.5cm、脚径10.4cmを測る。口縁下部に2条の沈線を有する。また脚柱部にはカキ目が施されている。59は図上で復元した横瓶である。口径6.4cm、最大高12.3cm、底径5.8cmを測る。口縁下部から頸部にかけてカキ目を有する。胴大半部はヘラケズリが施されている。

土師器 壺形土器・坏・高坏、甕形土器がある。60は外反する口縁をもち底部は平底状を呈する。61は口径13cm、器高42cm、底径6.7cmを測る。口縁部はわずかに外反する。62は垂直に立ち上る口縁部をもち調整はナデとヨコナデ、63は61と同様な口縁部の立ち上りをみせるが法量が多い。脚部は直線的な延びをみせ、端部は先鋭化する。65は口径13.6cm、残存器高14.4cmを測る。頸部と肩部の境が不明確で、口縁部は緩やかに外反する。外面にハケ目調整、内面にハケ目、ヘラケズリ、ヨコナデの調整がある。内面にわずかに赤色顔料が残存している。

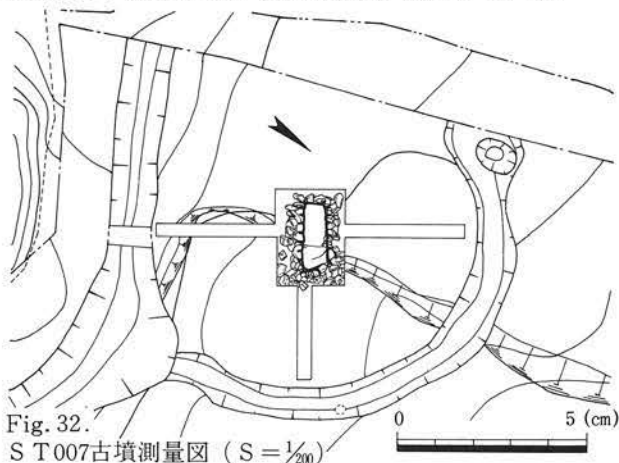
ST007古墳

ST007古墳は竪穴式石室を内部主体とする円墳である。A地区の南半にあり床面の標高は41.4mを測る。南にST002古墳、北にST003古墳がある。

墳丘・周溝 西半部がミカン園の段差により削平されている。北、東、南部には10～20cm程度で墳丘が残存している。周溝は西北部から東南部までめぐっており、東南端はST002古墳の周溝に切られている。

石室 墳丘のほぼ中央にあり、旧地表を整形して地山に長軸2.39m、短軸1.56mで楕円形に掘り込まれた竪穴に造られている。蓋石は東端の一枚が残存しているが、概ね3～4枚の蓋石があったものと推定する。側壁は高さ0.15～0.20m、幅0.25～0.35m程度の、やや丸味を帯びた石を用い、下場で7～8個使用している。小口石は東側に高さ0.45m、西側に0.35mの偏平なものを用いており、その大きさや、他の古墳の方向から考えて東側が頭部か。石室の規模は内法で東西1.78m、南北0.68m、高さは天井石残存部で0.68mを測る。床面はほぼ平坦であるが、0.05m程度の貼床であった。

遺物 西半部が破壊されていたため、石室内部からは何も検出できなかったが、東部周溝から甕形土器を一個体検出した。



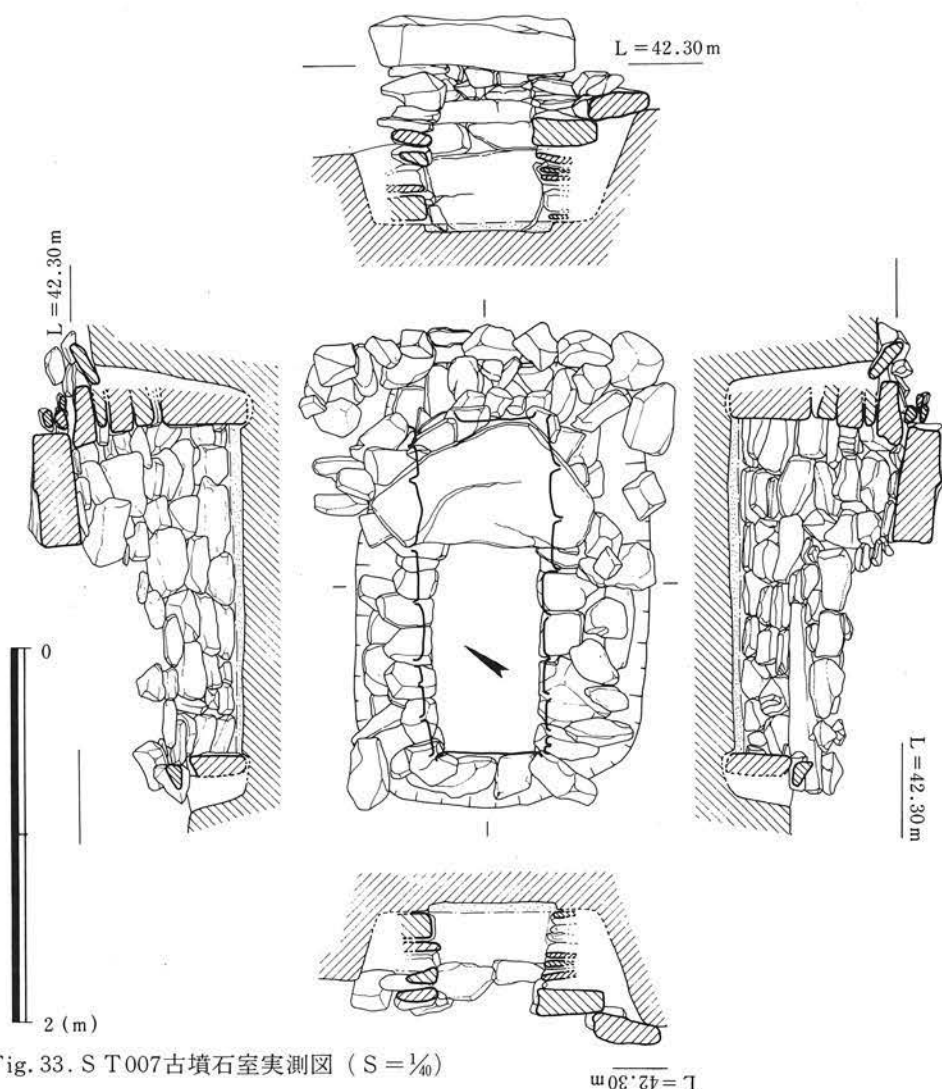


Fig. 33. S T007古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{40}$)

66は口径19cm、器高28.8cmを測る土師器の壺形土器である。最大径を胴部中央にもち25.7cmを測る。丸底の底部から器体はゆるやかに立ち上り、胴部は丸味をおびる。頸部に至って内外面の強いヨコナデにより内面に稜が形式され、口縁部は「く」の字状を呈する。胴部の器壁に対し口縁部のそれは厚くなっている。調整は外面ハケ目とナデ、ヨコナデ、内面は胴部がヘラケズリ、口縁部がヨコナデとなっている。色調は淡黄橙色を呈し、焼成は普通である。胎土は比較的大粒の砂粒を含む。

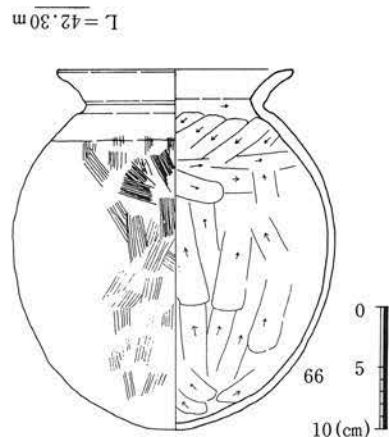


Fig. 34. S T007古墳出土土器実測図 ($S = \frac{1}{6}$)

ST008古墳

ST008は横穴式石室を内部主体とする円墳でB地区南端に位置し、床面の標高は約33.9mを測る。石室の西方、周溝との間に支石墓が2基存在する。

墳丘・周溝 削平をうけ全く残存していない。周溝は北西部から東部にかけて存在し、弧状を呈する。墳径は10m程度か。

石室 南方に開口し、奥壁に2枚、側壁に3～4枚の腰石を使用しており、幅1.4mを測り、長さは玄門部が完全に削平されているので明確ではないが、西南部の抜石の状況から考えて概ね2.0m程度と考える。東壁の腰石は奥壁に接して1個残存しているのみである。

遺物 玄室内からは全く検出しなかった。周溝北西部より土師器が一括して出土した。器種は埴、坏等である。67は内湾する口縁をもち、底部は平底気味の丸底。外面はハケ調整のあとナデ。

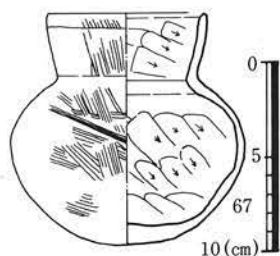


Fig. 37. S T008古墳出土土器実測図 (S = 1/4)

ST009古墳

ST009古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳でB地区中央に位置し、床面の標高は35.7mを測る。南接して甕棺墓群、支石墓等がある。上部構造は大きく削平されている。

墳丘 削平をうけ全く残っていない。周溝は西南部から東南部までめぐり、B地区では最も

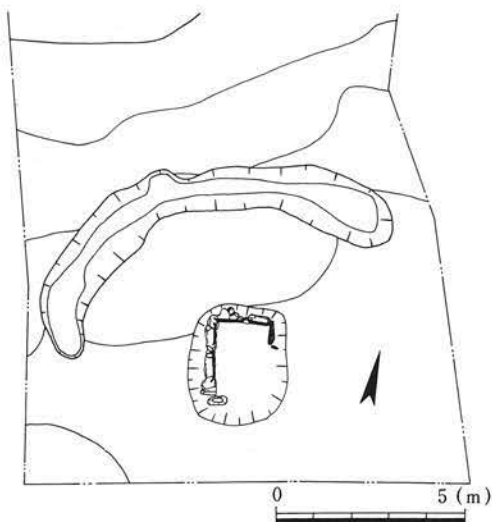


Fig. 35. S T008古墳測量図 (S = 1/200)

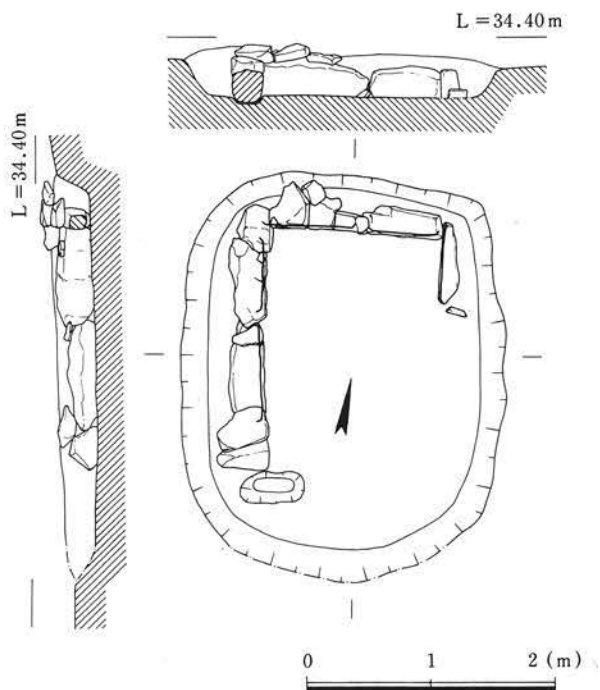


Fig. 36. S T008古墳石室実測図 (S = 1/60)

周溝の残存状況が良い。周溝幅は0.6～1.0m程度で、西と東がやや広がっている。周溝北東部より、数個の塊石を検出したが、ST010古墳同様、墳丘からの流入と考える。

石室 西方に開口し、奥壁2枚、側壁3～4枚の腰石を使用しており、幅1.65m、長さ2.45mを測る。玄門は幅0.8mで第一梱石が残る。掘方の北東隅を後世の攪乱により破壊されている。

遺物 周溝の北西部より一括して土師器を検出した。器種としては坏、甕形土器などがある。68は内傾する口縁部をもつ坏で底部は丸底。外面下半部にはヘラミガキ、他の部分にはヨコナデとナデが施されている。69は68と法量は同一規模であるが、口縁部の調整に違いがあり、強い回転ヨコナデにより口縁部がわずかに外反する。胴部外面下半部はヘラケズリ。70は口径12.4cm、器高12.0cmで底部は丸底。球形の胴部から頸部がくびれ、わずかに外反気味に立ち上り口縁部へとつづく。外面ハケ目、

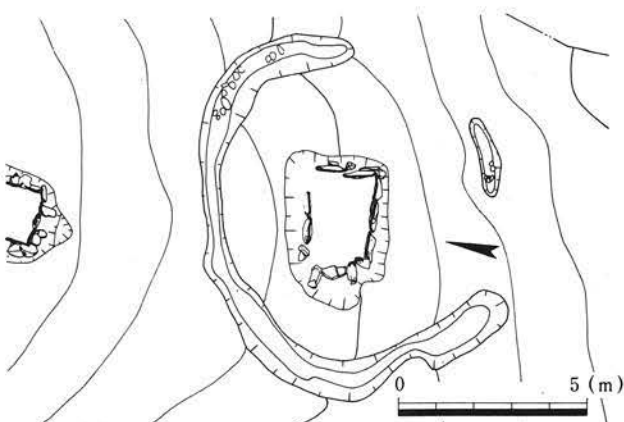


Fig. 38. S T 009古墳測量図 ($S = \frac{1}{200}$)
L = 36.10 m

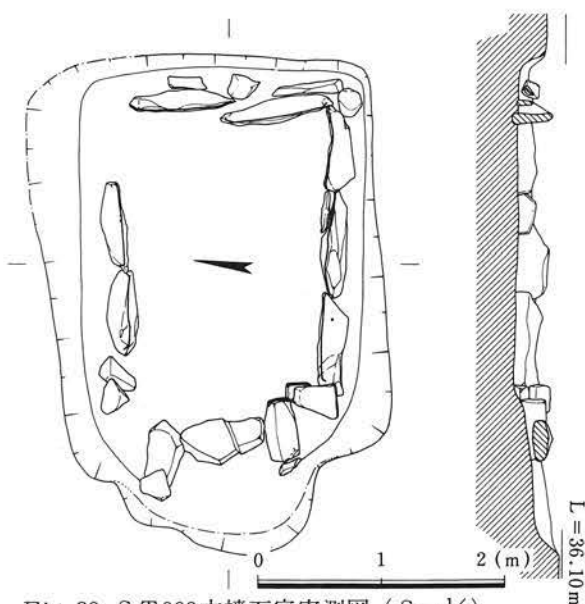


Fig. 39. S T 009古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{60}$)

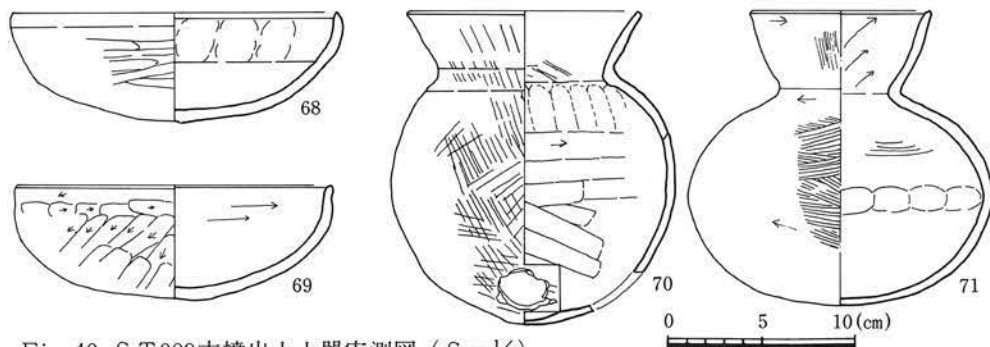


Fig. 40. S T 009古墳出土土器実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

ヨコナデ、内面ヘラケズリ、ナデ、ヨコナデ調整による。胴下半部に焼成後の穿口有り、71は楕円形の胴部をもち、頸部はさらにくびれ、口縁部は内湾気味に立ち上り、口唇部に至ってわずかに外反する傾向をみせる。外面ハケ目、ナデ、内面ヘラケズリ、ナデ調整による。

ST010古墳

ST010古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳でB地区北端に位置し、床面の標高は約36mを測る。南方約10mにST009古墳や支石墓、甕棺墓群がある。ミカン園造成の際、上部構造を大きく破壊されており検出したのは腰石と1～2段積みめの石組みのみであった。

墳丘 削平をうけ全く残存していない。周溝は北西から北東にかけて検出したが、元来地形の関係から一周してはいなかったものとする。

周溝内部より塊石を十数個検出したが墳丘からの流入と考える。

石室 南方に開口し、奥壁に2枚側壁に3～4枚の腰石を使用してあり、幅1.38m、長さ2.4mで羽子板状のプランを有する。玄門は幅0.42mで第一梱石が残存する。羨道は非常に短く、腰石も数個しか残っていない。閉塞石は全く検出なかった。

遺物 玄室の東西北壁寄りに鉄器を検出した。種別は刀、鉾、鏃である。表土下層及び周溝埋土表面より数点の須恵器を検出したが他所より流入した可能

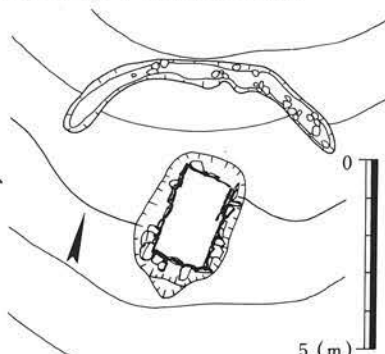


Fig. 41. ST010古墳測量図
($S = \frac{1}{200}$)
 $L = 37.17$ m

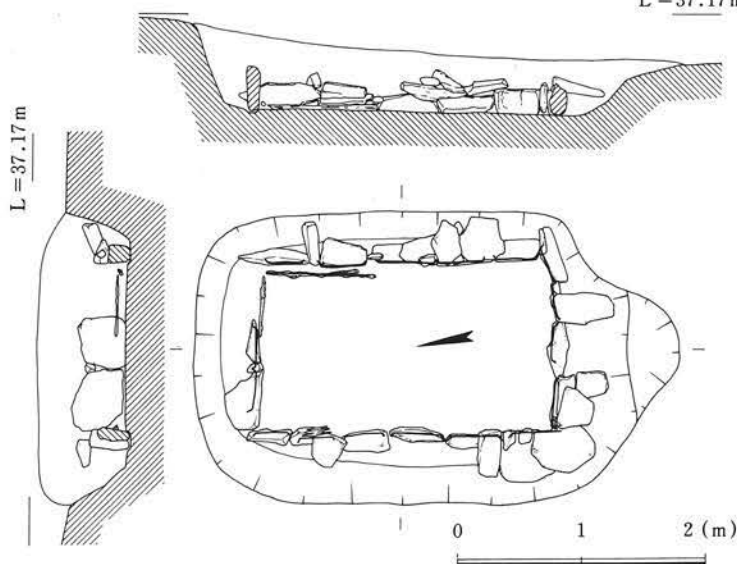


Fig. 42. ST010古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{60}$)

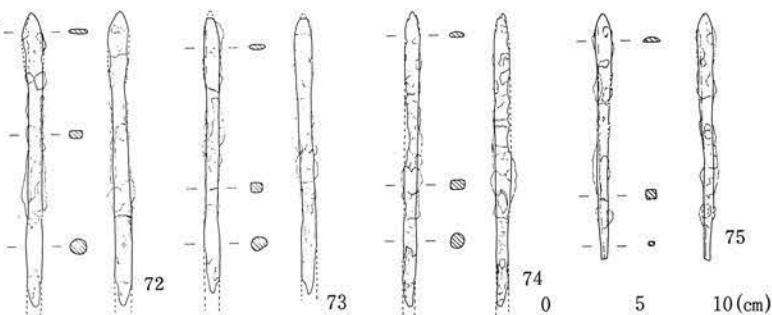


Fig. 43. ST010古墳出土鉄器実測図 ($S = \frac{1}{4}$)

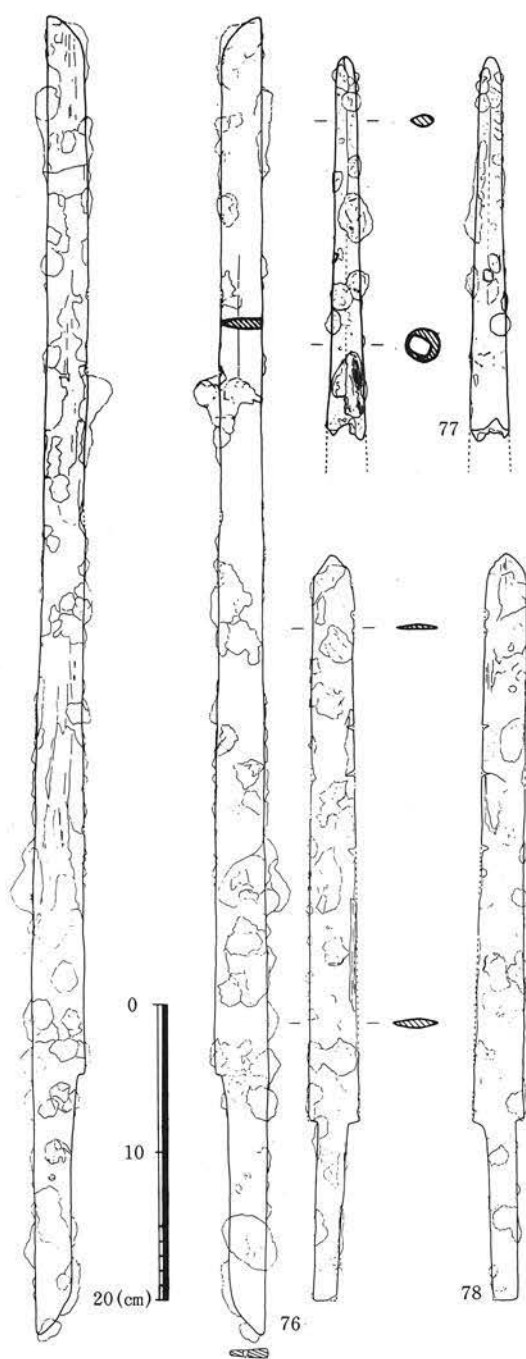


Fig. 44. S T 010古墳出土鉄器実測図 2 (S=1/2)

より西南部までめぐっており、一見方形にも見えるが、やはり円形を基調としたものであろう。周溝南端は近世の攪乱によって切られている。西南部は崖に近接して危険であったので、先端

性が高い。72～75は石室西壁中央部付近で一括して検出したもので尖根鏃である。すべて片丸造柳葉式で茎の中ほどの断面はいづれも方形を呈する。また72～74の茎下部には木質が認められ断面は円形を呈する。全長は完形でないので測るべくもないが、概ね17～18cmと考えるが、そうであれば75のみ、残存状況からみて法量の差異が認められる。また、茎下部の断面も長方形を呈し、他のものと異なる形状を有する。76は石室東壁部より77と折重さなった状況で検出した鉄刀で全長88.5cm、茎長17.4cm、身幅2.7～3.6cmを測る。目釘は1ヶ所にあり、刀渡り70.9cm。部分的に鞘と思われる木質の痕跡が認められる。77は残存長25.8cmを測る矛で、外面では刃部と茎部の境界が不明瞭である。袋部断面は隅丸長方形を呈する。78は全長50.3cm、刃渡り35.4cm、茎長12.3cm、身幅2.5～3.3cmを測る。目釘は2ヶ所にあり径0.2cmを測る。刃部に数ヶ所木質が残存する。

S T 011古墳

ST011古墳は竪穴系横口式石室を内部主体とする円墳と考える。A地区の先端にあり、約12×7 mのトレンチ内より検出し、床面の標高は38mを測る。東方に近接してSJ006 甕棺墓、SA003 支石墓が所在する。

墳丘・周溝 削平され全く残存していない。昭和43年当時の応急調査でも破壊墳として記録されていることから、昭和30年代に削平されたものであろう。周溝は東南部

部の検出を断念した。

石室 腰石と、部分的にその上に一段の石積みが残る。玄室は中央部で幅1 m、長さ2.0 mを測る縦長のプランである。石室の大半が削平されているため、玄室と羨道部の境界が明確でないが、左側壁手前の床面にある、上方が打ちくだかれている石は下部が埋め込まれた状況で検出したのでこれより以西が羨道部ではなからうか。

遺物 周溝埋土上層より土師器甕形土器片を少量検出した。この外遺構に伴うものではないが、周溝北部の埋土より弥生前期の甕棺片を少量検出した。

ST012古墳

ST012古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳でA地区北部に位置し床面の標高は48.9 mを測る。南部に近接してSR001祭祀遺構、ST004古墳などがある。

墳丘 削平をうけ全く残っていない。周溝は北部に淡黒褐色土が微量に見うけられたので元来存在していた可能性がある。

石室 南方に開口し、奥壁1～2枚、側壁3～4枚の腰石を使用しており、幅1.28 m、長さ推定2 m程度を測る。上部構造は大半が破壊されているが、側壁は腰石の上に1～2段の石積みが残る。床面は攪乱さ

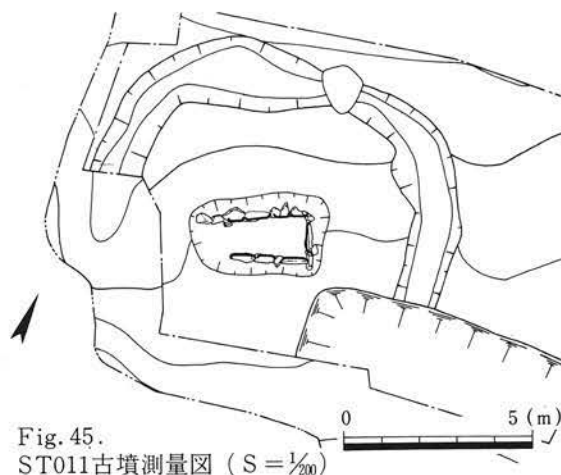


Fig. 45.
ST011古墳測量図 (S = $\frac{1}{200}$)

L = 39.00 m

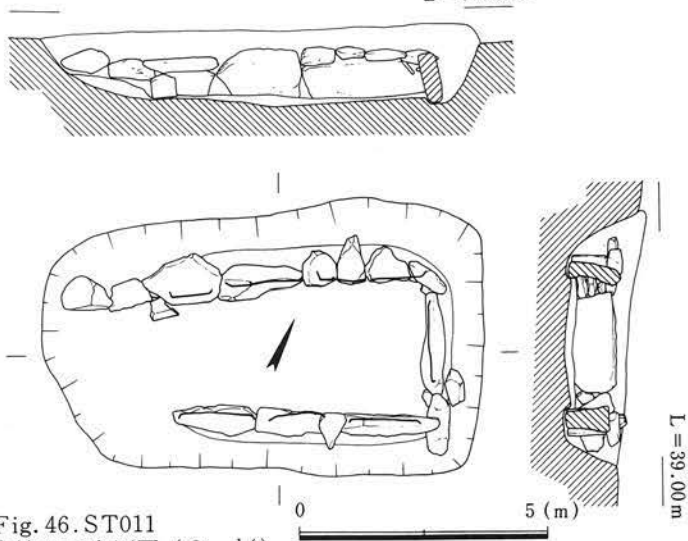


Fig. 46. ST011
古墳石室実測図 (S = $\frac{1}{60}$)

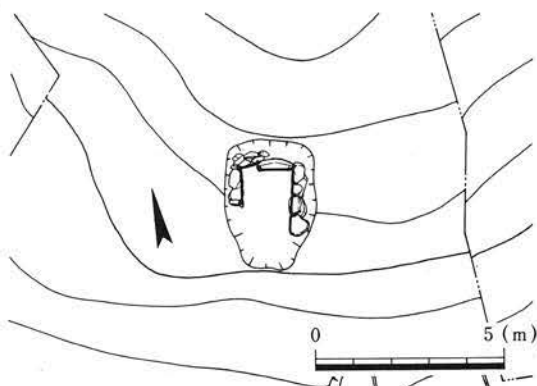


Fig. 47. ST012古墳測量図 (S = $\frac{1}{200}$)

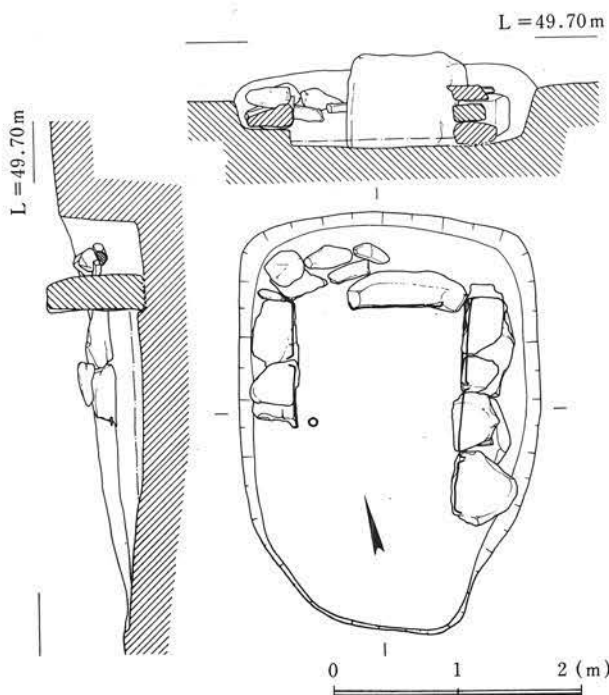


Fig. 48. ST012古墳石室実測図 ($S = \frac{1}{60}$)

れており検出面より10cm程度高かったものとする。左側の腰石下部で、階段状になっている所の土は非常に強固であり、その上に腰石を乗せている。裏込め石は奥壁部にのみ数個の花崗岩を用いている。

遺物 左側壁寄りに銅釦を1個検出した。検出レベルが床面より十数

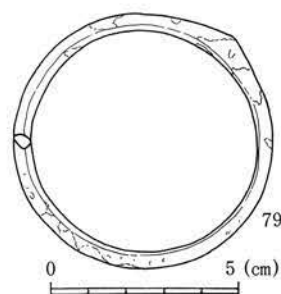


Fig. 49. ST012墳出土銅釦 ($S = \frac{1}{2}$)

cm高いので原位置より動いているものとする。79は断面隅丸の三角形を呈し、外径6.8cm、幅0.5cmを測るが、一ヶ所だけ幅0.75cmの部分がある。

ST013古墳

ST013古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳である。A地区の北端に位置し、A地区で最も傾斜が急な地点にあり、床面標高も60.7mと高い。周囲に古墳等の遺構はないが、上方より転落した自然石が多数見られる。

墳丘 自然流失によりあまり残っていないが、外護列石状の塊石の下に10~15cm程度残存していた。この列石は北端になるにつれて整然と置かれ、一見葺石状を呈する。周溝は明確に検出できなかったが、石室北側2m付近で淡黒褐色土が微量見られたので、元来山際にのみ存在していたものとする。

石室 上部構造は天井石の陥没に

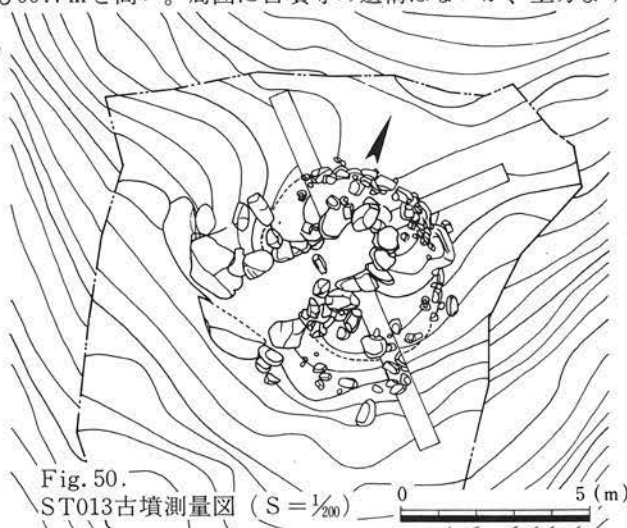


Fig. 50. ST013古墳測量図 ($S = \frac{1}{200}$)

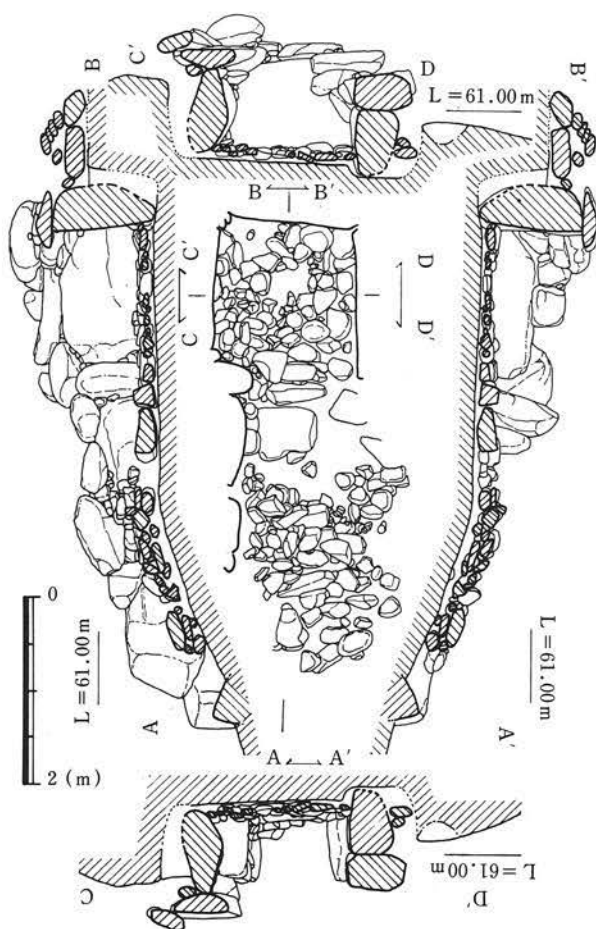


Fig. 51. ST013古墳石室実測図 (S = 1/80)

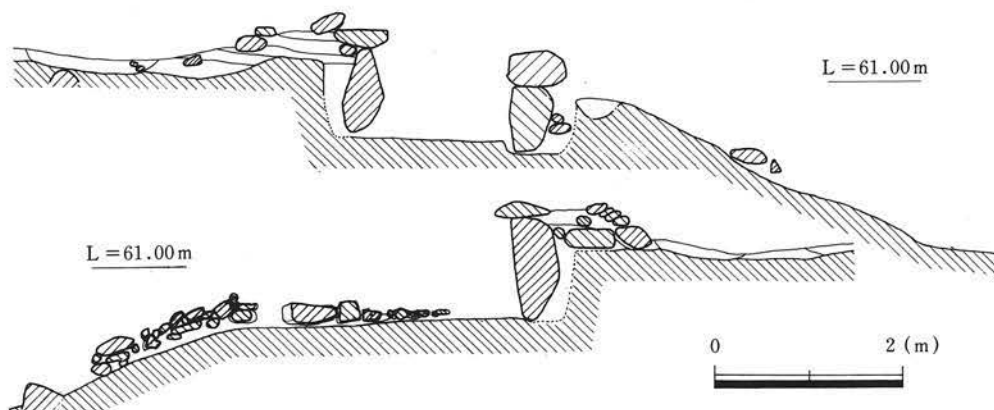


Fig. 52. ST013古墳墳丘断面図 (S = 1/80)

より破壊されているが、腰石の上の2～3段の石組みを奥壁・側壁共に検出した。玄室は幅1.52m、長さ1.7mを測る。床面は全面に敷石がある。玄門は高さ0.7m程度の石で形成され、下部の幅は0.9mを測る。羨道部は大分破壊されているが、側壁の一部に自然石をそのままの位置で用いているものがある。羨道床面から墓道にかけて径10～15cm程度の閉塞石を多数検出した。墓道は南方に大きく広がっているが、斜面で、掘方が浅いためそのプランは不明確である。

遺物 玄室より耳環5個、羨道部より土師器、墓道部、墳丘南西部より須恵器を検出した。このうち墳丘南西部より検出した須恵器は長さ2m、幅1m程度の自然石の下方に埋納されているような状況で出土した。須恵器の器種は甕、坏、高坏、横瓶等がある。80～82は径11.2～12.5cm、

器高3.5～4.3cmを測る。80・81は天井部外面にへラ記号を有する。81は径8.8cm、器高3.6cmで坏の中で最も量目が小さい。口径に比して器壁が厚く底部外面には顕著なへラケズリがある。

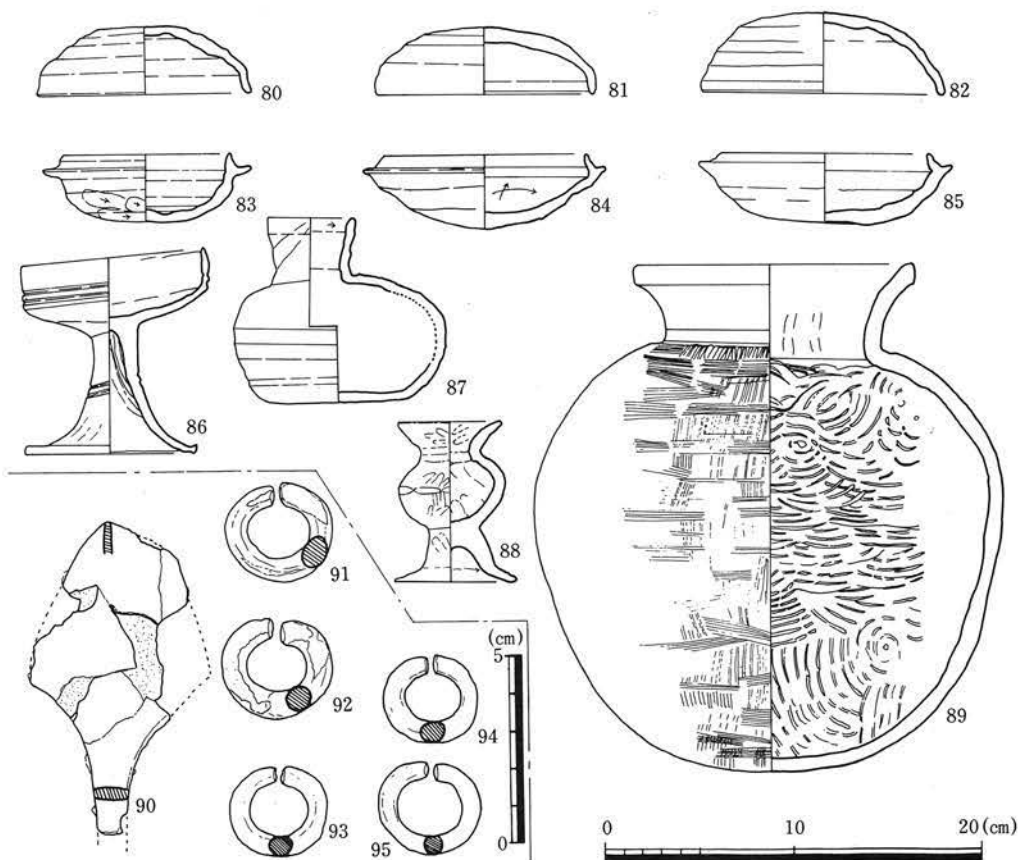


Fig. 53. ST013古墳出土遺物実測図 (S = 1/2・1/4)

口唇部は直立する傾向にあるが6mmと短い。外面に波状のへら記号を有する。86は墓道部より検出したもので受部径9.6cm、脚部径9.0cm、器高10.9cmを測り、坏部と脚柱部に波線を有する。87は横瓶で口径5.7cm、器高10.1cm。頸部外面にへら記号をもつ。88は羨道部より検出した土師器の台付壺である。口径5.5cm、器高8.6cm、脚径6.5cmを測る。調整は内面をナデ、外面をへらミガキによっている。内側口縁部に黒褐色の顔料と思われるものがわずかに付着している。89は甕形土器で、口径14.6cm、器高2.7cm。外面の調整は縦方向のタタキの後、横方向の刷毛目調整。90は鉄鏝で平造広根式に属する。茎からゆるやかに湾曲して関部を形成し最大幅をとる。残存長8.3cm、最大幅（推）5cm程度を測る。91～95はすべて玄室床面より検出した。径2.5～2.9cm、厚さ0.5～0.7cmを測る。

ST014古墳

D地区南端にあってST015方向からの傾斜が一端緩くなる付近に位置する。横穴式石室を主体部にする円墳で西方に開口している。石室は天井と南壁の一部が大木の根により破壊されて

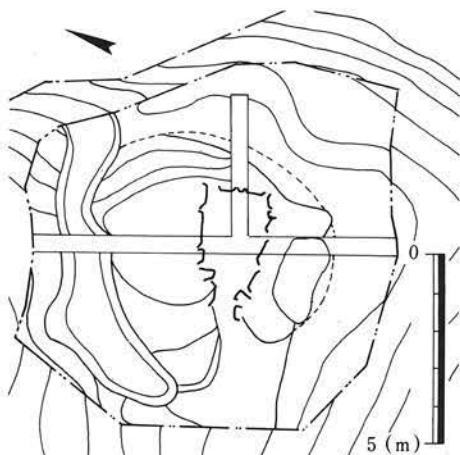


Fig. 54. ST014古墳測量図 (S=1/200)

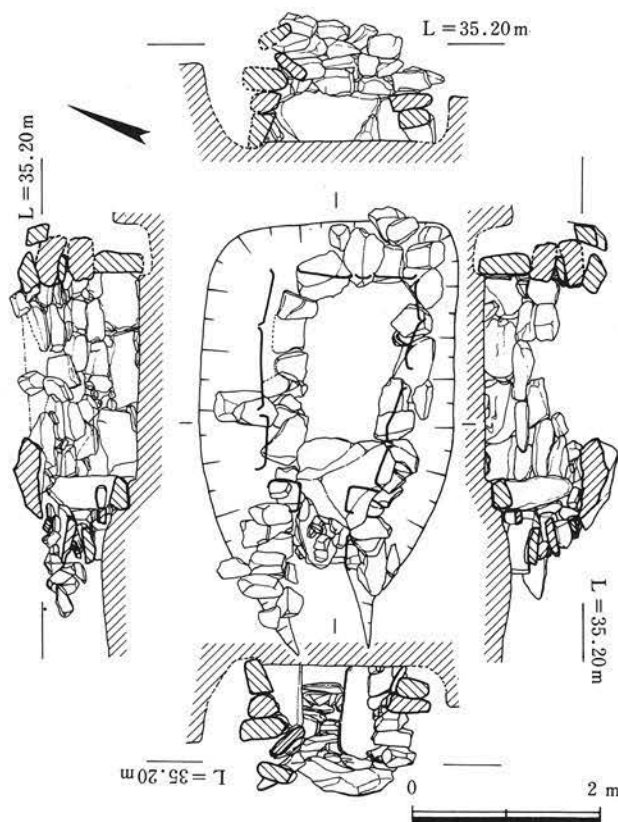


Fig. 55. ST014古墳石室実測図 (S=1/80)

いたが、盗掘も受けている様子である。当初この地区には古墳が存在することは知られておらず、調査途中の12月頃発見した。位置的にはST013古墳の存在する丘陵から谷を一つへだてた西北部にある。

墳丘 元来さほど墳丘は高く造られていないものとするが、やや良好の状態で検出した。主として封土は北部に多く形成しており下側にある南部はほとんど残存していない。また、谷側にあたる東部は自然崩壊して一部しか残存していないが、

元来多く盛るスペースはない。

周溝 東部から西部にかけてめぐり半月形を呈する。幅1.0 m程度、深さ0.1~0.2mを測り埋土は淡黒褐色。

石室 中央部で玄室幅1.54m、奥行2.2mを測り、床面の平面形は羽子板状を呈する。A地区ST011古墳と同じくらいの床面積である。腰石は北側壁に3個、南に4個、奥壁に2個使用している。玄門と玄室の境には天井石が一個残存しており、原位置を保っているものとする。この石から推定すると玄室中央部は床面から天井まで1.4~1.5m程度あったものと考えられる。玄門は左右の袖石により形成されており、玄門幅は最下部で0.45mを測る。羨道部には

遺物 墳丘の表土下層で土師器と思われる土器片を検出したが、あまりに細片で、時期・器

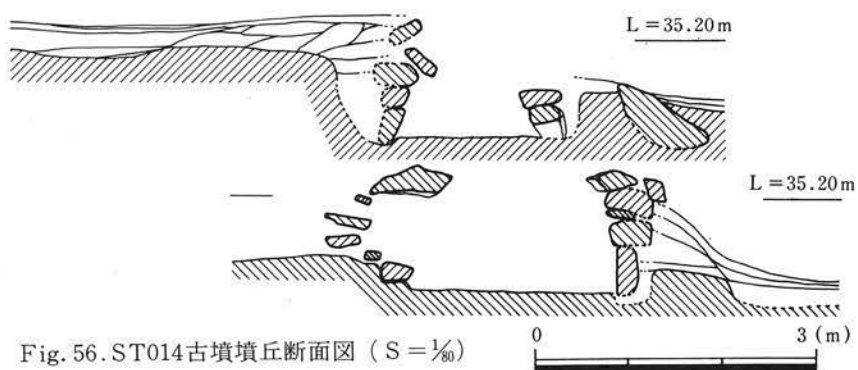


Fig. 56. ST014古墳墳丘断面図 (S=1/80)

床面の標高は68.9mで当調査区で最も高い所に位置する。石室の大半が破壊されており、腰石の上に数個の石積みを残すのみである。

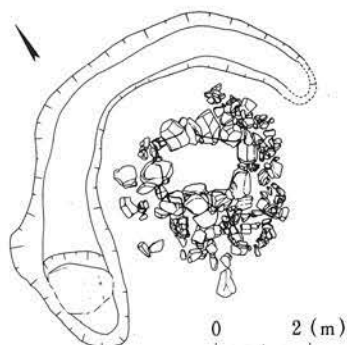


Fig. 57. ST015古墳
測量図 (S=1/80)

墳丘 大半が削平されているが、東、西、北に15~20cmの厚さでわずかに墳丘が残存している。径は約4mである。一部に旧表土がみられ、全面的な地山整形はしていないものと思われる。北部から南部にかけて径15cm程度の塊石が多数検出された。

周溝は西南隅から東部にかけてめぐり、幅0.8~1.0m、深さ0.1~0.2mを測る。

石室 玄室幅1.65m、長さ1.2mを測る横長のプランを有する。L=69.80m

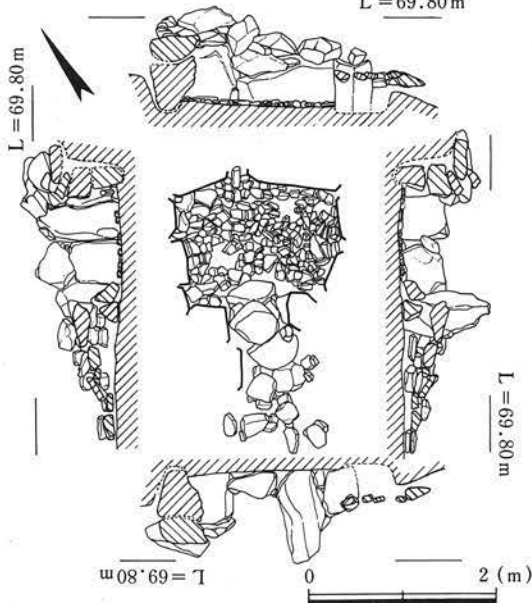


Fig. 58. ST015古墳石室実測図 (S=1/80)

る。奥壁と西壁に1~2段積みの石が腰石上に残存する。床面には一面に拳大の石が敷かれている。玄門は左右の袖石により形成されているが、左の袖石は2段積であったものとする。玄門幅は最下部で0.45mを測り、梱石が遺存する。羨道は短かく、左右とも数個の腰石が残存しており、床面には塊石による閉塞施設がみられる。墓道は幅0.5m程度で南方に延びるが、プランは明確でない。

遺物、玄室、羨道、周溝のいずれからも全く検出しなかった。

(4) 祭祀遺構

A地区北部に2か所検出した。いずれも

種共に判明し得ない。

ST015古墳

D地区北端にあって、横穴式石室を内部主体とする円墳である。

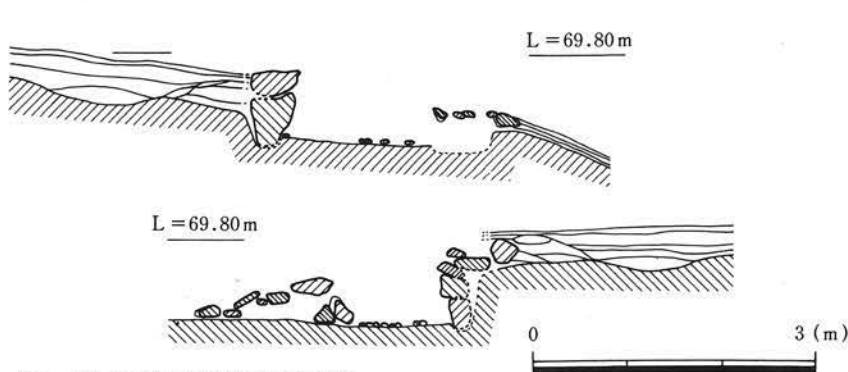


Fig. 59. ST015古墳墳丘断面図

上部を削平されており残存状況はあまり良くない。古墳周辺に存在することから墓前祭祀かとも考えたが、古墳の造営時

期と祭祀遺構出土の土師器の年代が合致しない。

SR001祭祀遺構

SR001祭祀遺構はA地区北部の、ST004古墳とST012古墳の間に位置する。果樹園造成や貯水槽設置により破壊をうけており、上面の平面形は不明である。この遺構を検出する時に、貯水槽東方1.5mを中心に径2m程度の黒色土部分を検出したが、輪郭はあまり明確にはわからなかった。厚さ15~20cmの黒色土を除去するうちに遺物は北方の淡黄褐色土の中からも検出され、遺物出土範囲が広がった。複合口縁の壺形土器に北接して東西約3m程度の段差を検出したが、これが掘方の北辺であろうか。いずれにしても、何らかの掘込みの中に土器を設置（埋置）した祭祀遺構と考える。

出土土器はすべて土師器で、壺形土器の外、甕形土器、小型丸底埴、手捏土器、高坏等を検出した。この外、黒色土下層で鉄片を検出したが器種は不明。

SR002祭祀遺構

A地区北部、ST004古墳の東側にあって周溝との距離は0.2m程度である。南北約2m、東西検出全長約2m、深さ0.2mで上面の平面形は概ね長方形を基調としたものとする。床面はゆるやかな起伏があり、淡黄褐色砂まじりの地山に掘込んでいる。埋土は黒褐色を呈し、上層部より高坏、甕形土器を検出したが、幾分後世の攪乱をうけている。

遺物 2箇所の祭祀遺構より、手捏、小形丸底埴、高坏、壺形土器、甕形土器を検出した。96・97は手捏土器で径4.3~5.2cm、器高4.1~4.4cmを測り丸底。調整は主としてナデ、押圧による。98~101は小形丸底埴で径8.4~9.3cm、器高8.7~9.6cmを測る。98~100の口縁が内湾気味に立ち上るに対し、101は外反気味で器壁も厚い。調整は口縁部をヨコナデ・ナデ・刷毛目により、胴部外面をナデ・刷毛目、内面をヘラケズリによっている。101の胴部内面は底部付近がヘラケズリ、上半部は力強いナデによっている。102~104は高坏である。104のみ図上復元が可能であったが、口径13.6cm、器高13.6cm、脚径12.8cmを測る。特徴的なこととして103・104が脚柱部がエンタシス状のふくらみをもつものに対し102は直線的である。調整はヨコナデ・ナデ、刷毛

目などが主としてなされている。103は複合口縁をもつ大型の壺形土器である。口径19.5cm、器高56.8cmを測り、ほぼ完形である。口縁部内外面共にヨコナデ、胴部外面を刷毛目とナデ、内面は下半部をヘラケズリ、上半部を刷毛目とナデによっている。

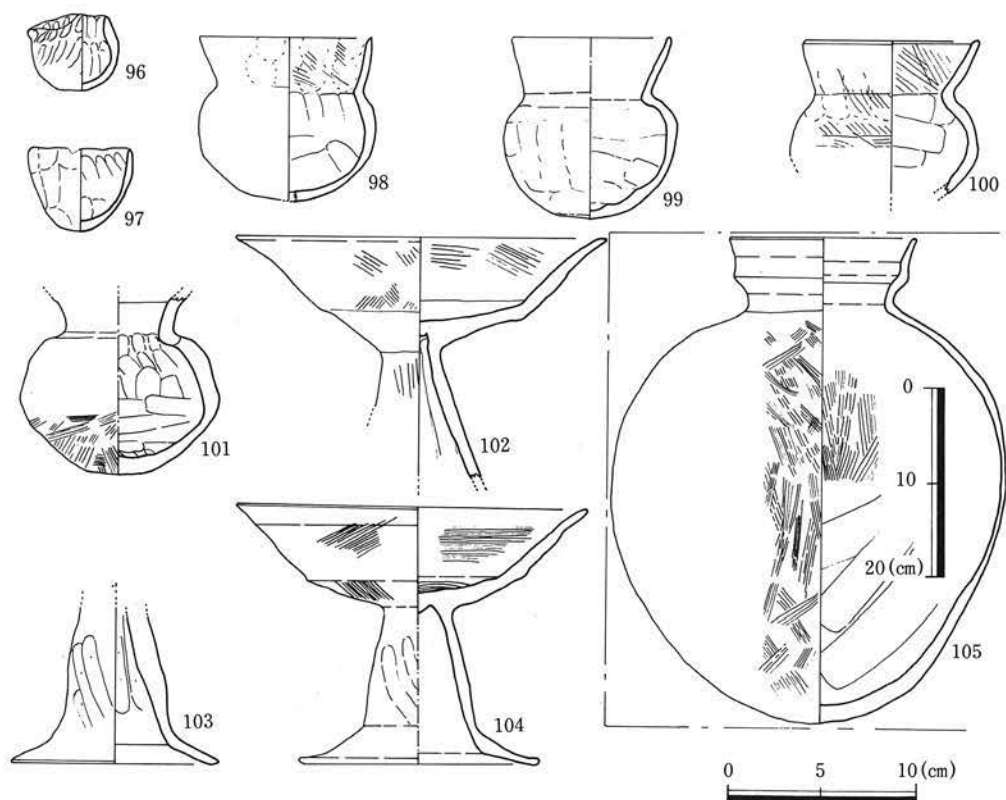


Fig. 60. SR001・002祭祀遺構出土土器実測図

(6) その他の遺構

A地区の中央、ST007古墳の東側で不定形の土壌を3箇所に出した。6.8×1.2mの溝状のもの、1.5×1.5m、1.5×3mのものがあり、深さは0.15～0.2mを測る。埋土が淡黒褐色を呈し砂粒が混在する。遺物については弥生期と思われる土器細片を一点検出したのみである。また、ST012古墳の北側約10m付近にトレンチを設定した。古墳・甕棺等の遺構は存在しなかったが、比較的多くの遺物が検出された。遺物の種類としては土師器の高坏、小型丸底埴、その他の土器片や、勾玉などがある。周辺に祭祀遺構でもあったのだろうが、果樹園造成の際破壊されたものとする。

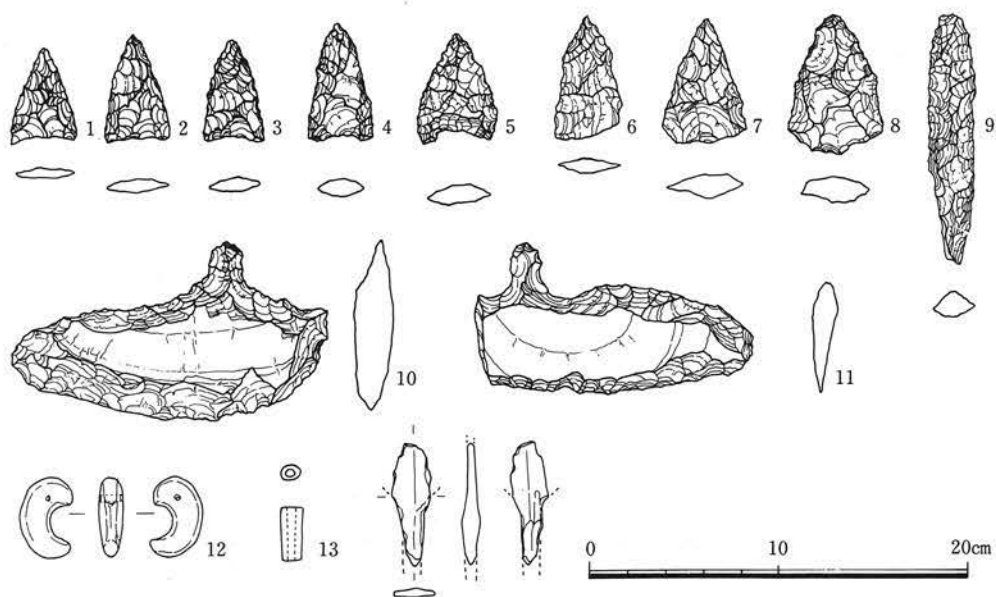


Fig. 61. 石器・石製品・銅製品実測図

表2. その他の遺物観察表

	器 種	出 土 地 点	材 質	法 量(cm)	備 考
1	石 鏃	A地区埋土下層	サヌカイト	長さ 幅 厚さ 2.4 × 1.7 × 0.25	
2	〃	〃	〃	2.75 × 1.75 × 0.35	
3	〃	〃	〃	2.55 × 1.6 × 0.4	
4	〃	ST002周溝埋土	〃	3 × 1.7 × 0.5	
5	〃	ST007墳丘下層	〃	2.8 × 2.1 × 0.45	
6	〃	A地区埋土下層	〃	3.3 × 1.7 × 0.4	
7	〃	〃	〃	3.3 × 2.3 × 0.65	
8	〃	ST002周溝埋土	〃	3.7 × 2.5 × 0.7	
9	〃	ST004墳丘下層	〃	6.6 × 1.25 × 0.55	
10	石 匙	SR002埋土	〃	8.5 × 4.8 × 1.05	
11	〃	A地区埋土下層	〃	7.3 × 3.9 × 0.65	
12	勾 玉	A地区北トレンチ		2.1 × 0.85 × 0.6	
13	管 玉	SA007支石墓		1.45 × 0.55 × 0.2	
14	銅 鏃	ST007周辺		3.3 × 1.0 × 0.2	

IV ま と め

支石墓について

支石墓については昭和20年代に調査された葉山尻遺跡、五反田遺跡^{註1}等が良く知られているが、昭和49年に大和町南小路で発見されるまでは脊振山南麓には存在しないものとする考えが主流をなしていた。

その後、昭和50年に九州横断自動車道建設に伴う調査で「支石墓」が発見された。^{註2}（丸山遺跡）しかし、この時点では支石墓が古墳の墳丘下に入り、掌石も見当たらないので「支石墓様遺構」の名称が用いられていた。丸山遺跡移設は昭和56年に実施されたが、それに伴う調査で古墳下層を精査したところ、百基以上の「支石墓」が検出され、その名称が確定的なものになった。また、相前後して中原町香田遺跡^{註3}、大和町礫石遺跡^{註4}でも支石墓の発見が相次いだ。

さて、ここでいう支石墓とは、南鮮の碁盤石状の系譜を引くもので、長方形の土壌を穿ち数枚の扁平な石を蓋石とし、その上に数個の頭骨大の支石があり、またその上に畳1枚程度の掌石を置くものといっておかろう。このような「支石墓」の条件にあてはまるものが、丸山遺跡・香田遺跡・礫石遺跡のそれにいくつあるであろうか。もちろん検出状況においてそのものでなくとも、周辺の状況、他の完構を保っている支石墓の状況からしていわゆる支石墓にあてはめられようが、もしある遺跡で検出された「支石墓？」のすべてに支石・掌石がない状況で検出されたとしたらどうであろうか。可能性の問題であるが、後世の開発行為で上部構造が破壊された場合といわゆる「石蓋土墳墓」であった場合である。当遺跡のものを含めて石蓋土墳墓様のものを支石墓と言い切っているが、もし、縄文時代晩期～弥生時代前期にかけて石蓋土墳墓が存在するならば「支石墓」は当を欠く言葉であるといえる。ちなみに丸山遺跡の支石墓はその数からして百以上の掌石が存在する必要があるが、古墳造営に転用されたにしても残存数が少なすぎると考える。

甕棺墓について

支石墓と同時期もしくはやや後出するものと考え。B地区で集中して検出されたが、古墳造営に際して破壊されたと考えられるものを含めても10基以下の群集程度である。また、A地区ST011古墳周辺でも2～3基であろう。時期的には弥生前期前半を中心としたものであろうが、佐賀地区におけるこの時期の甕棺墓の在り方をみると南麓の舌状丘陵に多く存在する傾向がある。また墓域もせまく前期末以降の甕棺墓に見られるような配列はないように見うけられる。

これまでの古墳の調査

金立・久保泉地区の山麓は多くの古墳が存在するが、これらが、昭和30年代後半のミカン園造成事業による破壊の憂き目にあったことはすでに述べたところである。このような中で限定された調査とはいえ、金立地区では昭和42年に10日間、43年に7日間の調査がなされている。^{註5}

当時は期間、費用に相当の制約があったのでその調査方法も羨道部の発掘、石室の清掃、個別墳丘測量、石室の実測程度であったので、古墳どうしの位置関係、周溝の存在、前庭部の発掘等が明確にされていなかった。

ところで、昭和42・43年の調査で古墳の位置関係は不明確なものの、その序列・石室法量表から今回調査を行なった古墳と対比させると同一古墳は次のようになる。

金立地区古墳群22・23・24・25・26号墳→黒土原遺跡ST001・002・007・003・004古墳となる。

古墳について

調査の地区分けがほぼ古墳のグループとなるが、今回調査を実施しなかった部分（保存部分）も考えあわせると、当地区にはC地区ST005・006号墳の一連のグループとして香田氏宅・出雲神社境内のものをあわせた一群、調査区西端で保存される古墳である3基の一群を追加することができよう。ここで単純に古墳造営時期の順序を考えると、最古のもので5世紀中頃～後半（ST007古墳）から造営が開始され、次にST011・014古墳にみるような玄室幅が非常にせまい横穴式石室→ST008・009・010古墳に見るような羽子板状のプランをもつ石室→ST001・015古墳に変化するものとする。ST001・015古墳については土器も検出されておらず石室もT字型（横長）を呈することから年代を与えずらいが、^{註6}金立開拓遺跡ST012古墳を例にとり7世紀後半～8世紀初頭の所産と考え、特異な玄室床面プランも終末期古墳の一形態ととらえたい。

また墳丘の形態については、ST003古墳は調査区の古墳の中でも特異なもので「内護列石」というべきものをもち、他のものと一線を引くことができる。このことについては、時期や立地が限定される旨の報告があるが、その中でも列石の積み方に雑なものと整然と積まれているものがあるとする。

註1 佐賀県教育委員会『北九州の支石墓』

註2 " 概報『丸山遺跡』昭和54年3月

註3 " 『香田遺跡』昭和56年3月

註4 " 昭和56年度調査

註5 佐賀市教育委員会、佐賀市金立地区・久保泉地区古墳群 昭和44年

註6 佐賀県教育委員会『金立開拓遺跡』昭和59年3月

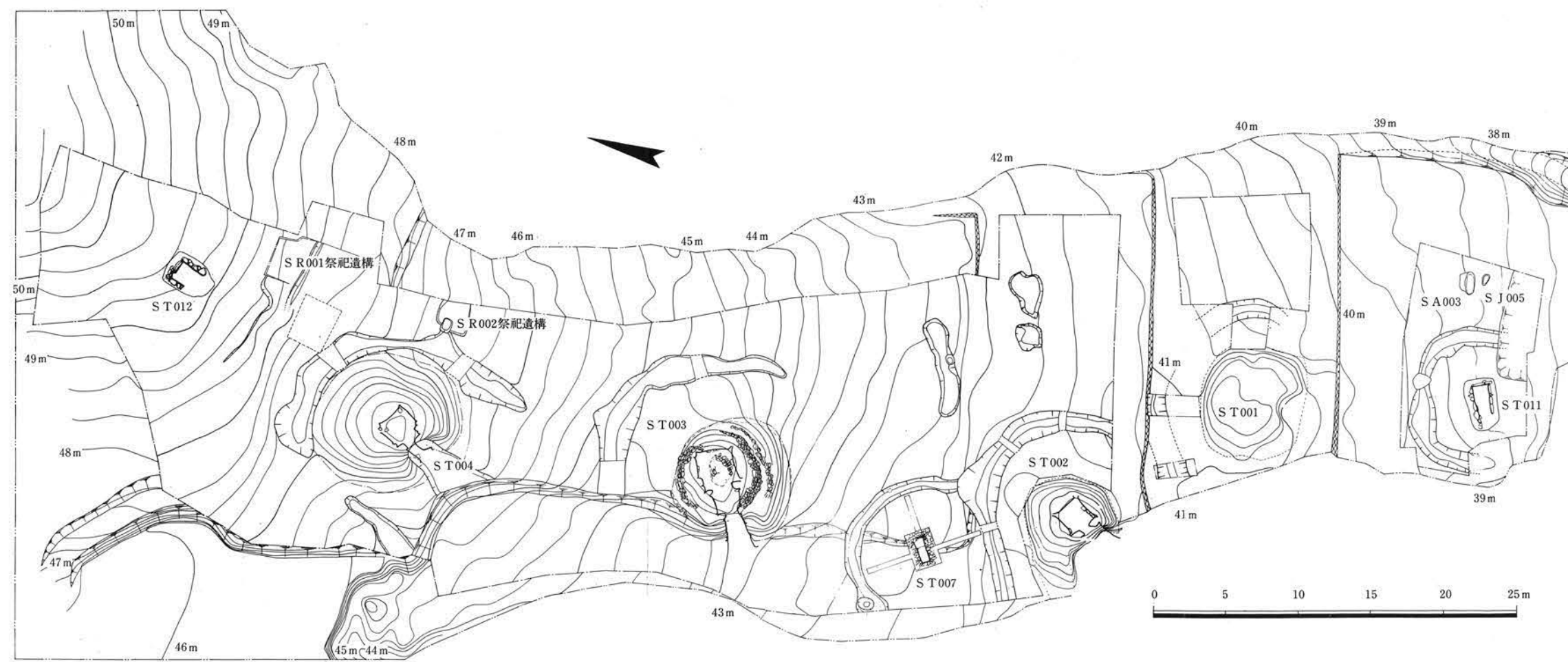


Fig. . A地区遺構配置図

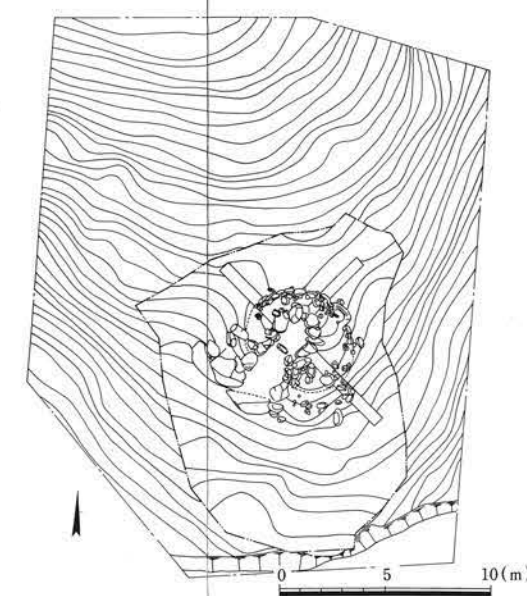


Fig. 63. A地区北遺構配置図

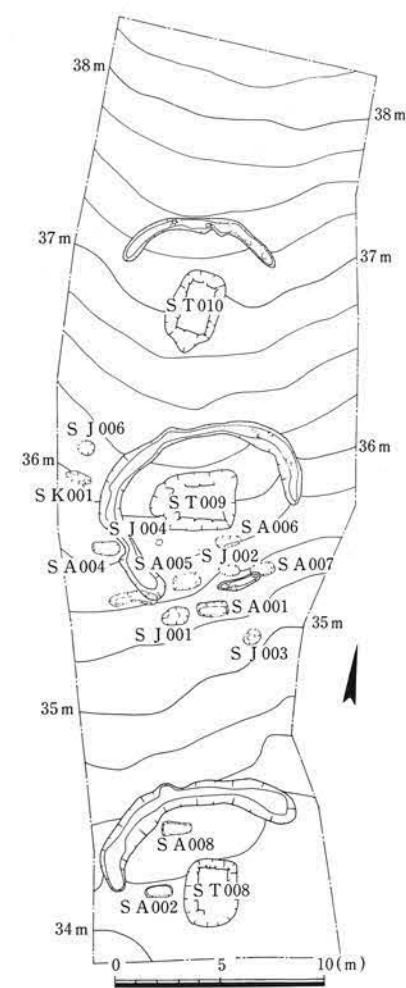


Fig. 64. B地区遺構配置図

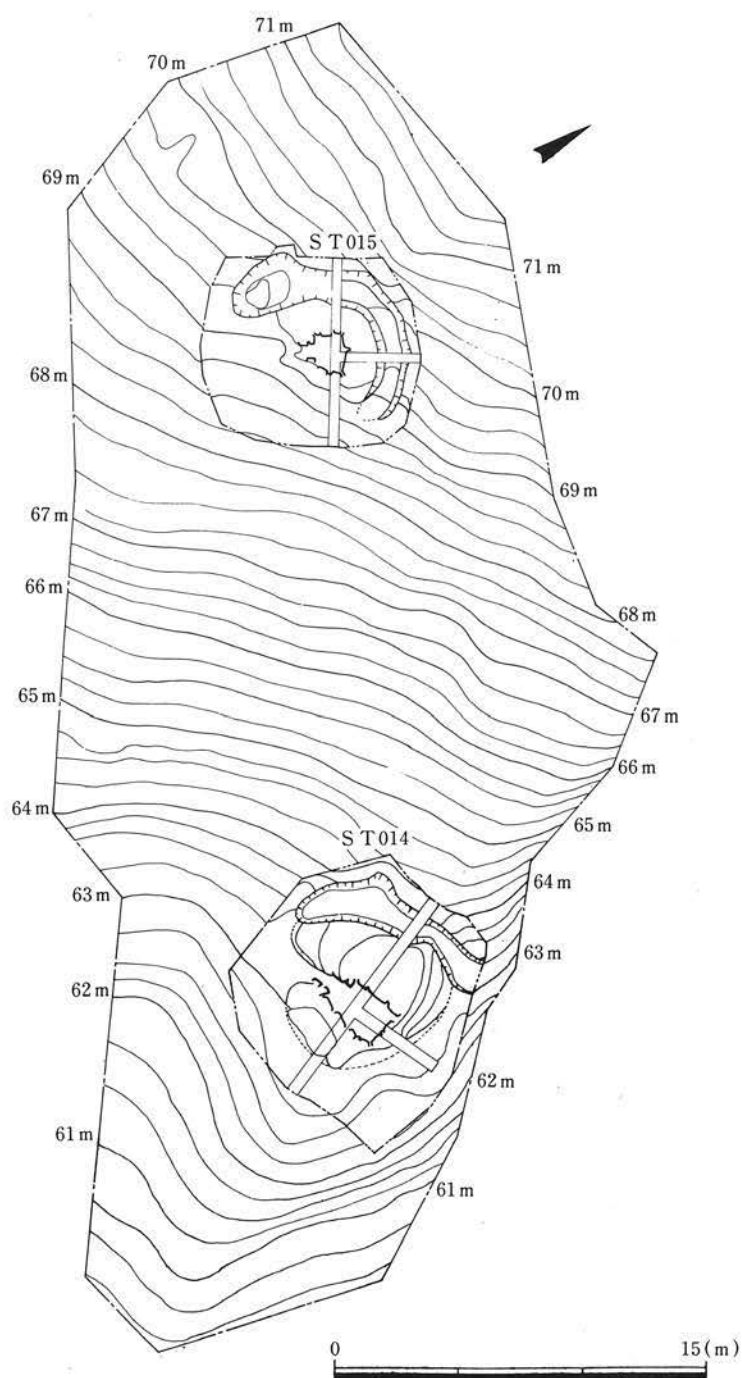


Fig. 66. D地区遺構配置図

図

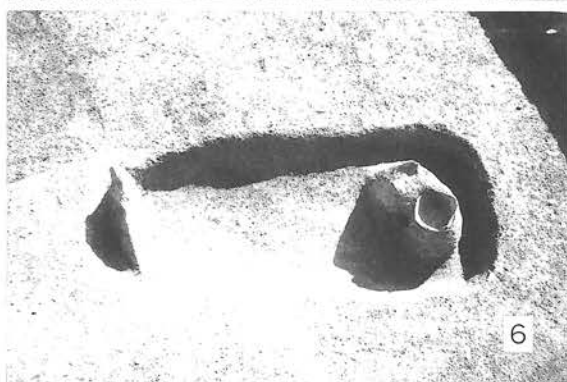
版



1. A·B地区全景 2. A地区全景 3. B地区全景



1. C地区 2. D地区



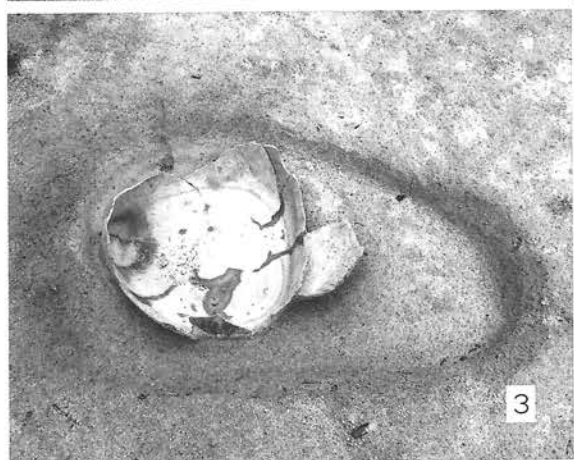
3. SA001支石墓 4. SA002支石墓 5. 同
6. SA004支石墓 7. 甕棺墓群 8. SJ001甕棺墓



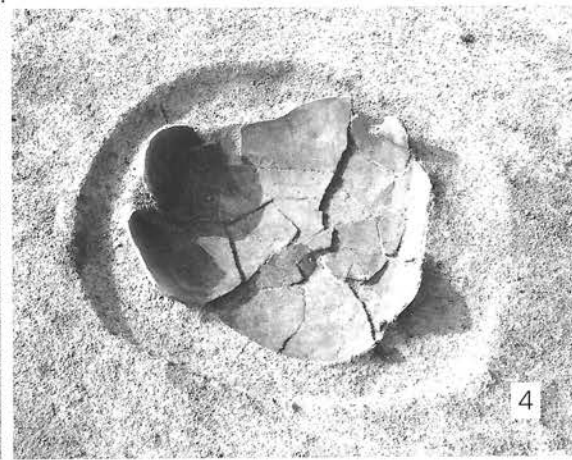
1



2



3



4



5



6



7



8

1. SJ003甕棺墓 2. SJ005甕棺墓 3. SJ005甕棺墓 4. SJ006甕棺墓
5. ST003墳丘(東から) 6. ST003墳丘(北から) 7. ST003古墳 8. 同左



- | | |
|--------------|------------|
| 1. ST004古墳全景 | 2. 同 |
| 3. 同奥壁 | 4. 墳丘除去後 |
| 5. 入口をのぞむ | 6. ST005古墳 |
| 7. ST005古墳奥壁 | 8. 同入口をのぞむ |



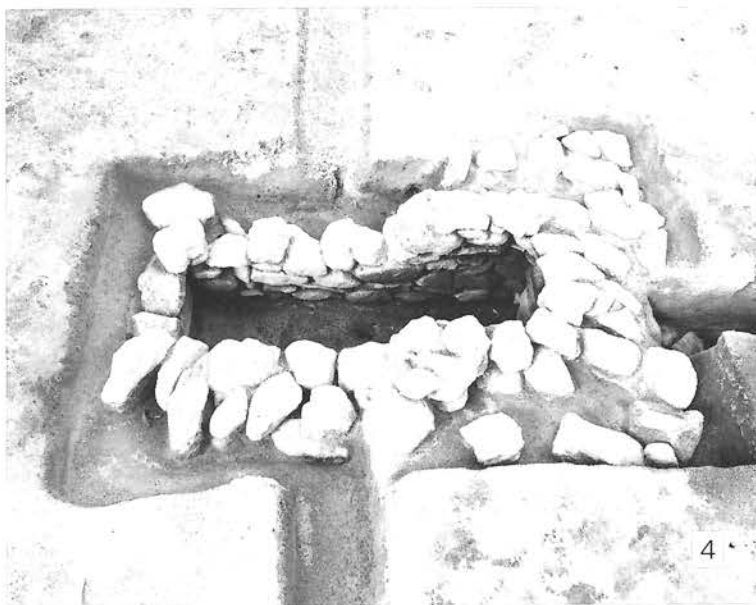
1



2



3



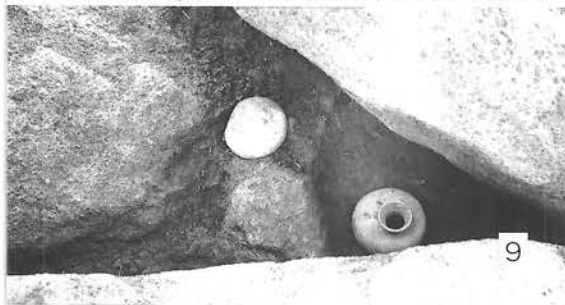
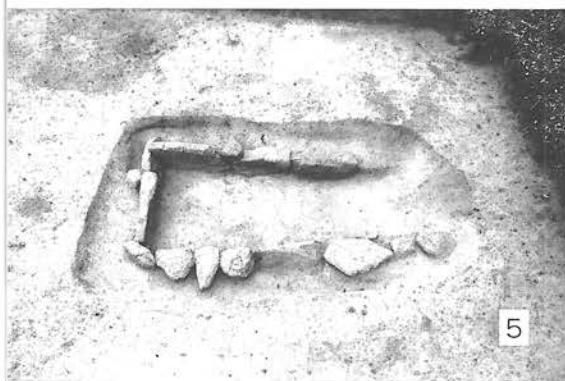
4



5

1. ST005古墳前室
4. ST007古墳石室

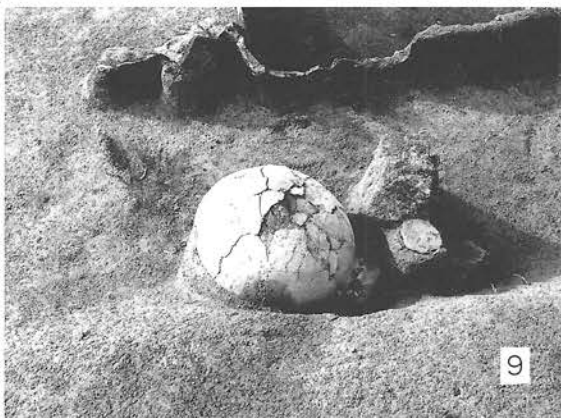
2. ST005古墳西壁
3. ST007古墳全景
5. ST007古墳周溝出土土器



1. ST008古墳 2. ST009古墳
3. ST010古墳 4. ST011古墳
5. ST011古墳石室 6. ST013古墳
7. ST013古墳(北から)
8. ST013古墳玄室床面
9. ST013墳丘西側遺物出土状況



1. ST014古墳 2. ST014古墳(西から)
 3. ST014古墳玄室(入口をのぞむ)
 4. ST014古墳玄室(奥壁をのぞむ)
 5. ST015古墳 6. ST015古墳石室
 7. SR001祭祀遺構
 8. SR002祭祀遺構
 9. SR001土器出土状況





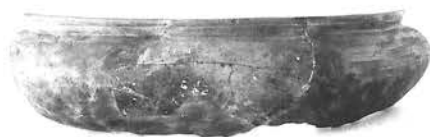
1



2



4



5



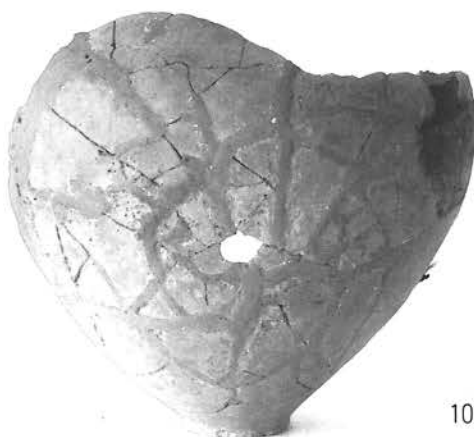
7



8



9



10



11

- | | |
|-------------|--------------|
| 1. SA001 | 2. SA001 |
| 4. SK001 | 5. SK002 |
| 7. SJ001(下) | 8. SJ003(下) |
| 11. SJ001供献 | 10. SJ004(下) |



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



40



30



41



39



43



42



46



45

26~30. ST003

39~43. 45. 46. ST004



47



48



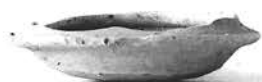
50



49



54



52



57



56



59



58



61



60

47. ST004

48~50. 52. 54. 56~61. ST005



62



63



64



65



66



67



68



69



70



71

62~65. ST005
66. ST007
67. ST008
68~71. ST009



80



81



82



83



84



85



86



87



88



89

80~89. ST013古墳



96



101



97



102



98



103



99



104

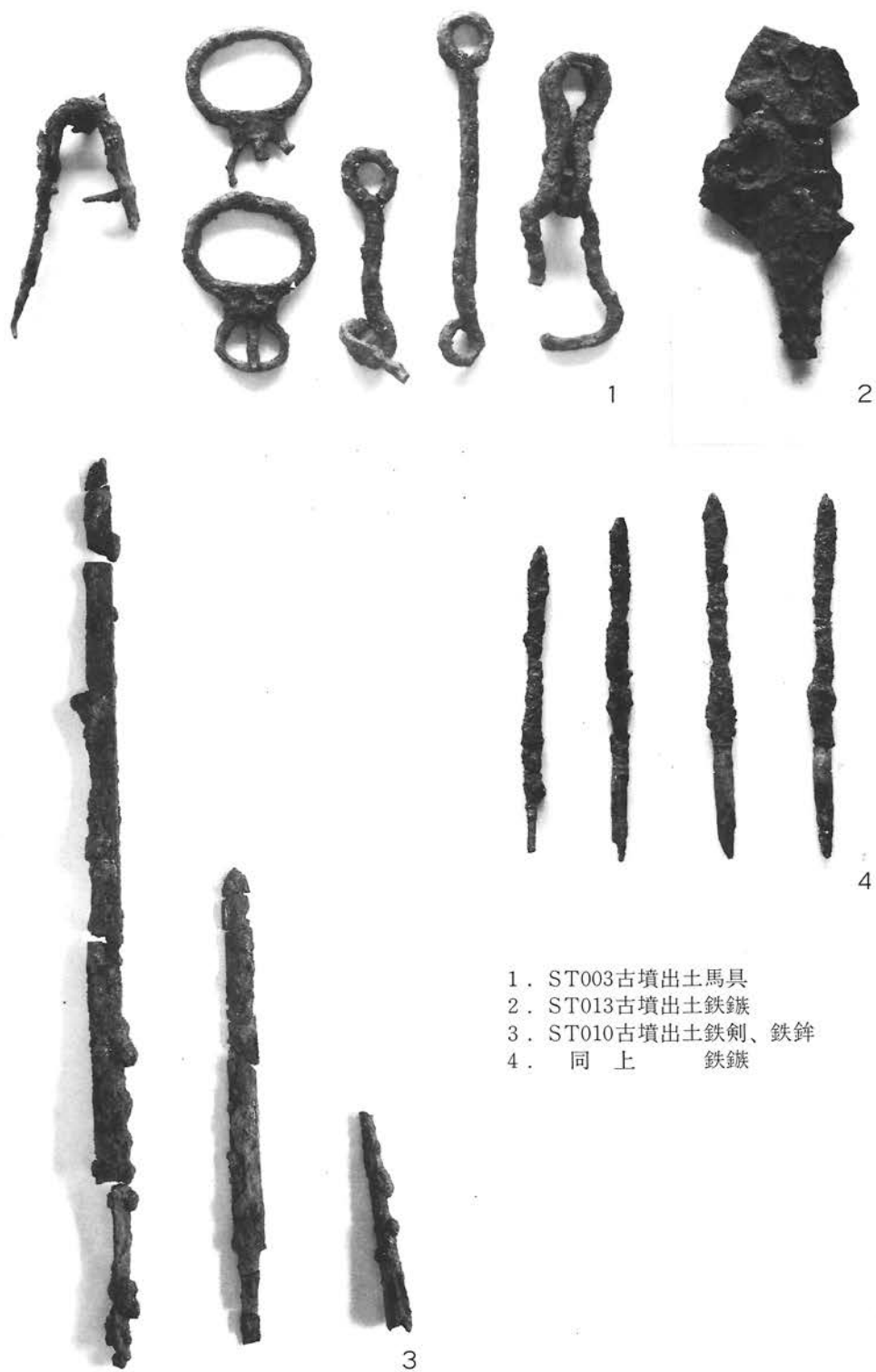


100

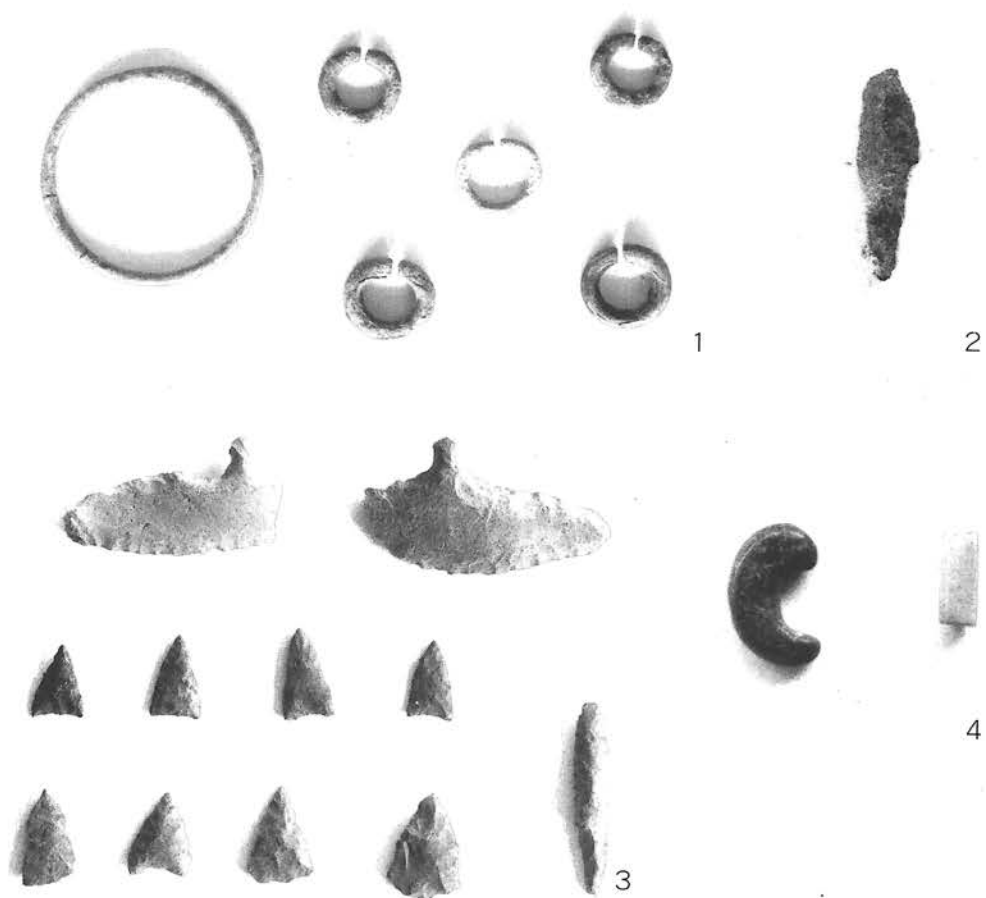


105

96~103, 105. SR001
104. SR002



1. ST003古墳出土馬具
2. ST013古墳出土鉄鏃
3. ST010古墳出土鉄剣、鉄鉾
4. 同上 鉄鏃



1. ST012古墳出土銅釧、ST013古墳出土耳環
2. ST013古墳出土鉄鏃
3. A地区出土石器
4. A地区北トレンチ出土勾玉、SA007出土管玉

佐賀市文化財調査報告書第19集

黒土原遺跡

昭和62年3月31日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 副島印刷
佐賀市高木瀬町大字長瀬1136-52